

翻 訳 通 信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目 次

■ 100号によせて	山岡洋一	1
— 「翻訳通信」の歩み		
■ 翻訳家の仕事	有賀裕子	4
— キツツキと猫——翻訳をめぐる随想		
■ 本にまつわるあれこれ	津森優子	6
— これからの本のかたち		
■ エッセイ 気になる日本語	若林暁子	7
— 秋の夜の月待つほどの手すさびに……		
■ 翻訳の作業環境	井口耕二	17
— 翻訳作業の効率化		
■ 翻訳のインフラ	伊豆原弓	21
— 一翻訳者の仕事場・2010年		
■ 辞書について	酒井邦秀	25
— 英和辞典の問題点と理想の辞書	そして 翻訳を志すみなさんへ	
■ 辞書について	山本康一	30
— 辞書出版はどこに向かうか		

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp
(@は半角文字に変えてください)

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

「翻訳通信」の歩み

「翻訳通信」は今月号で第Ⅱ期第 100 号になりました。第 1 号は 2002 年 8 月号ですから、8 年にわたって発行してきたことになります。2400 人を越える熱心な購読者に支えられて 100 号を迎えることができ、感謝にたえません。

現在の「翻訳通信」は第Ⅱ期ですが、第Ⅰ期は 1994 年 4 月号から 2002 年 5/6 月号（第 58 号）まで発行されています。第Ⅰ期からの通算では 16 年にわたって、合計 158 号を発行しています。

第Ⅰ期は、仁平和夫、伊豆原弓、山岡洋一の 3 人が中心になって発行しました。3 人は翻訳会社の同僚だったのですが、第 1 号発行の少し前に独立し、産業翻訳を行いつつ、出版翻訳にも進出しようと苦闘していました。顧客開拓の方法を検討した結果、翻訳者がカレンダーやタオルなどを贈るのではあまりに芸がないと考え、文章を書いて送ることにしました。「翻訳通信」の出発点は翻訳営業だったのです。

出版社の編集者を中心に、数十人の顧客や見込み顧客にほぼ隔月刊の通信を郵送しました。数年間、送り続けた結果、出版翻訳を受注できたケースもあって、まずまずの成功を収めることができました。

当時はまだ、何の肩書きもない翻訳者がノンフィクションの重要な本を訳す機会はなかなか得られませんでした。また、翻訳調の規範がかなり強い力をもっていて、翻訳のスタイルという点で顧客と意見が合わないことが少なくありませんでした。そこで、「翻訳通信」では翻訳調を超える翻訳スタイルを論じ、原文の語と訳語の一対一対応の問題点を指摘し、新しい規範になりうる名訳を紹介することに力をいれました。

たとえば第 1 号には「基本語の意味を考える — INCLUDE は「含む」か」が掲載されています。英語の INCLUDE と日本語の「含む」には微妙な意味のズレがあって、無視できない違いがあることを論じました。この語を「含む」と訳さないと意識だといわれ、誤訳だとすらいわれるので書いたものです。

「基本語の意味を考える」はその後「翻訳通信」

第Ⅰ期の柱として連載し、第Ⅱ期がはじまる直前の 2002 年 7 月に『英単語のあぶない常識』（ちくま新書）として出版されています。第Ⅰ期の連載からは『翻訳とは何か — 職業としての翻訳』（日外アソシエーツ）も出版されていますので、ある程度の成果はあったといえると思います。

2000 年代に入って、「翻訳通信」は当初の目的を達成したと思える状況になっていました。仁平和夫は『ディズニー 7 つの法則』（日経 BP 社）などのヒット作をつぎつぎに生み出す売れっ子になっていましたし、『トム・ピーターズの起死回生』（TBS ブリタニカ）のように、売れ行きはそれほどでもなかったものの、目の覚めるような名訳もありました。伊豆原弓もコンピューター関連を中心とするノンフィクション出版翻訳で確固とした地位を築いていました。わたしも、営業が必要な段階を過ぎていました。

そこで、さまざまな方から助言をいただいた結果、「翻訳通信」の読者を拡大し、主に一般読者と翻訳者を対象に、翻訳の新しい潮流を伝えることを主眼にしようと考えました。印刷して郵送するのではなく、メール・マガジンを発行するようにしました。こうして生まれたのが、今回 100 号を迎えた第Ⅱ期です。

一般読者を対象にしようと考えようになった一因は、古典新訳です。第Ⅰ期第 40 号（2001 年 1/2 月号）に書いた「21 世紀の古典翻訳の可能性」に思わぬ反響がありました。古典新訳を本格的に検討する出版社がこのころから増えていたからだと思います。個人的には翻訳専門になったころから、『国富論』などの古典新訳を目標にしていたのですが、2000 年代に入って、この目標を実際に目指せるようになってきたのです。訳すことはできても、そして何の肩書きもない翻訳者による新訳を出版してもらえたとしても、売れなければ担当編集者と出版社に迷惑をかけるだけになります。そこで、ささやかながら読者開拓の努力をしようと考えたのです。

☆ ☆ ☆

第Ⅱ期の 8 年間にはいろいろなことがありました。

はじまった直後に仁平和夫が 52 歳で急逝し、ショックを受けました。追悼特別号と「仁平和夫小論集」を発行し、天才的な翻訳家の死を悼むことにしました。「小論集」は 8 年後のいまでも話題になるほど優れており、翻訳家が何よりも母語での執筆者であり、表現者であることを示しています。仁平を超えるノンフィクション翻訳家はいまだにあらわれていないと思います。

せせらぎにすぎなかった古典新訳が少しは川らしくなってきたのもこのころです。いくつもの出版社が古典新訳を出版するようになり、話題にもなりました。相変わらずの学者訳も少なくないのですが、なかには過去の古典翻訳のイメージを変えるような訳もあります。個人的な目標としていた『国富論』については、第Ⅰ期の終わりごろから検討を進め、既訳の問題点を指摘してきましたが、第Ⅱ期がはじまった直後からは本格的に取り組むようになりました。何度か中断を挟みながら、2006 年にほぼ完成し、2007 年 3 月に日本経済新聞出版社から出版されています。肩書きがない翻訳者が訳したものであるにもかかわらず、そして、上下 2 巻でほぼ 8000 円という価格にかかわらず、意外なほど売れ行きが良く、3 年半たったいまでは部数が当初予想の 3 倍に達しています。

手前味噌ではありますが、それまで何年か、「翻訳通信」で主張しつづけてきたことが、ある程度は役立ったのではないかと考えています。つまり、『国富論』の既訳は 2000 年に新訳として出版された水田洋監訳・杉山忠平訳（岩波文庫）すら、「原書」を読むための参考資料になるように訳されていて、訳書だけを読んで意味が分かるようになっていないという主張です。拙訳『国富論』は大河内一男、大内兵衛らの大学者による既訳が多数あるなかで、一風変わった翻訳を試みたわけではなく、21 世紀の主流になることを目指しているとも暗に主張してきました。

少し前の時代なら、こういう主張は身の程知らずの大風呂敷、大言壮語だと馬鹿にされるだけだったでしょう。そうはならなかった（少なくとも本人の耳に届く形ではそうならなかった）のは、この間に時代が大きく変わったためだと思います。翻訳に肩書きが不要になり、翻訳関係者にとって素晴らしい時代になったのでしょう。

大学教育に少しばかり首を突っ込むようになった

のも、この時期です。1980 年代前半からの友人である染谷泰正氏がこのころ、フリーの立場から大学教育に転じ、翻訳の授業を担当しないかと打診されたからです。翻訳者教育には 1980 年代半ばから取り組んでしまったのだが、翻訳者育成を直接の目的としない教育に関与したのは、これがはじめてでした。その成果は第Ⅱ期の「翻訳通信」で何度も紹介しています。たとえば、2008 年 5 月号から 9 月号にかけて連載した「翻訳講義」や、2008 年 12 月から 2009 年 3 月にかけて連載した「『アメリカ独立宣言』の翻訳」などがあります。2006 年 1 月号の「翻訳の楽しみ — 『さゆり』を読む」も講義の記録です。

週に 1 回にすぎませんが学生を教えるなかで、いまの学校教育の問題点が少しずつみえてきたように思います。幸い、学生は熱心だし、真面目だし、優秀なのですが、それにしては学習が不足していると感じました。たとえば、英語の文章をあまり読んでいません。とくに論理的な文章を読んでいません。英文法の教育をあまり受けていないので、一読しただけでは意味が分からない文章になると、お手上げという学生が多いようです。辞書を引く習慣ができていません（電子辞書かインターネットの辞書で済ませている学生が大部分です）。要するに、しっかりした教育を受けてきていないようなのです。会話や発音はうまい学生が多いのですが、論理的な思考と論理的なコミュニケーションの能力については、いかにも教育が不足しているという印象を受けました。

翻訳者である以上、教育に取り組むのなら、目的は翻訳者の育成しかありえないとそれまでは考えていましたが、これを契機に考え方が変わってきました。背景のひとつとして、翻訳者育成を目的とする教育には限界があると感じていたことがあげられます。翻訳者は本人しだいであって、できる人は仕事を確保するきっかけさえあれば、何も教えなくてもできるようになるし、実力が不足している人に教えても、教え方が悪いからでしょうが、たいていはあまり伸びないのです。過去 25 年、翻訳者教育に取り組んできましたが、自慢できる「弟子」は 5 人程度です。その 5 人も仕事を紹介したという意味では役立ったとしても、教えたからうまくなったとはいえないのです。

しかし、翻訳を目的とする教育から翻訳を手段にする教育に目を転じると、可能性は無限に広がって

キツツキと猫——翻訳をめぐる随想

イソップ寓話のようなタイトルだが、べつに何かの教訓を込めているわけではなく、翻訳者としての日々の雑感をしたためようとしたところこのタイトルに落ち着いた。ちなみに、キツツキと猫のほかにゴマフアザラシも登場する。

最初に考えたのはもっと長いタイトルだった。近ごろは長いタイトルの本が売れているので、もしかしたら無意識のうちにそのトレンドに影響されているのだろうか……などと自分に問いかけながら、タイトルが長い場合は覚えやすい愛称があったほうがよいけれど、愛称は見つかりそうもないし……と空想がとめどなく広がったところで、「この文章はそもそも売るために書いているのではなかった」とはたと気づき、現実に戻ったのだった。

* * *

時々翻訳の仕事について聞かれるのだが、何と答えていいかわからずいつも戸惑う。自分でも答えがわからないのだ。それらしい答えを用意することはできる気もするが、どうも何かが違うように感じて落ち着かないためうまく答えられずにいる。たとえばこんなふうに。

Q「翻訳の仕事って面白い（好き）ですか」

A「……」

Q「なぜ翻訳の仕事をしたと思ったのですか」

A「……」

まして、「翻訳って儲かるんですか？」などと聞かれようものなら、頭のなかに次から次へとクエスチョン・マークが浮かんできて、文字どおり首をひねってしまうのだ。幸いにもいまのところ、首のひねりすぎで怪我をしたことはないけれど。

こんな調子だから翻訳について話したり書いたりした経験はほとんどないのだが、それはきっと、わたしにとって翻訳とはするものであって考える対象ではないからだと思う。

身も蓋もない表現かもしれないが、「今日はあと何ページ」「今週はあと何ページ」「今月はあと何ページ」「終わりまであと何ページ」というように、ノルマと睨めっこしながら、いまここにある原文を読んでキーボードを叩く作業、それがわたしにとっての翻訳である（もちろんこの合間には、辞書を引いたり、調べものをしたり、訳が決まらずにウンウン唸ったりしている）。

どの仕事もそうだろうが、この仕事も嬉しい時も

あれば辛い時もある。しかしそれはさておき、花も嵐も踏み越えて、今日もコツコツ、明日もコツコツ、あさってもコツコツ、しあさってもコツコツ訳さなくてはならない。だから、仕事をしている時の自分を動物にたとえるとキツツキだと思っている。

コツコツしているあいだは樹木、いやパソコンに張りついているから、どちらかという行動範囲が狭く、人と会う機会も多くはない。けれど、小さいころから気に入った本ばかりを何度も読む偏愛癖があり、多読や速読とは無縁のわたしには、一冊の本と長く付き合うこの仕事が性に合っているのかもしれない。何しろ、一冊分の訳稿を仕上げるまでに数百時間はかかるのだ。

翻訳は、このように地道に積み重ねていくタイプの仕事であるため、旬の表現に倣うなら「続ける力」「粘る力」が求められる。

だが、それ以上に大切なことがあるとわたしは考えている。コツコツをはじめる前に、つまり仕事を引き受ける前に、「自分に訳せるかどうか、訳せるとしたらどれくらいの期間がかかるか」をしっかりと見極めることである。何百ページもの本の翻訳を引き受けた後でこの見極めを誤ったとわかった場合、スタミナのないわたしにとって挽回はほとんど不可能であるため、この見極めはとても大切である。納期までに無事に訳了できるかどうかは、8割方はこの見極めしだいだと思っている。

1 ページのワード数はどれくらいか。読み慣れている分野かどうか。平均して一文は長いか短いか。文章に強いクセはないか。中身は抽象的か具体的か。調べなくてはならない事柄は多いか少ないか。調べものが多い場合、入手しやすい資料はどれくらいあるか……。これらの条件しだいでは、たとえ同じ分野の同じページ数の本でも、訳出にかかる日数は大きく異なってくる。測ったわけではないが、直感的には優に5倍以上の開きがある。だから仕事の引き合いがあった時、真っ先にするのは上に書いたような視点から原文を眺めることである。

「どれくらいの期間で訳了できるか」にこだわるのは、納期を守るためだけでなく、自分を守るためでもある。身体が資本だから、無理をして健康を損なっては元も子もない。キーボードを叩かないかぎり、あるいはほかの方法で訳稿をつくらないかぎり、訳了には決して近づかないのだから、その作業を途切れさせるわけにはいかない。このため、睡眠時間を削らずにできるかぎり一定のペースで仕事を進めら

れるよう気をつけているのだ。

健康管理は、いまのような景気の悪い時期には特に大切だと感じている。フリーランスの場合、どうしても「一度断ると次から仕事が来なくなるのではないか」という思いを抱きがちであるし、景気が悪いと焦りが生じたりもする。ところが幸か不幸か、出版翻訳に関するかぎり仕事の量や労力と収入は比例しない。だから、自分のためにも、結果的に依頼元に迷惑をかけないためにも、無理をせずマイペースを貫くことを肝に銘じている。

ところで、仕事の量と収入は比例しないと書いたが、わが家の場合、わたしの仕事量と比例するものがひとつある。食費である。いくら仕事のスケジュールを綿密に立てたつもりでも、機械ではないから調子のよい日もあれば悪い日もあり、予定よりも少しペースが落ちた分を挽回する必要に迫られることは珍しくない。そこでしわ寄せが行くのが食事のしたくだ。自分だけなら、忙しい時は残りものでもかまわないのだが、残りものが続くと家族の反乱に遭うから、家の近くで外食となる。外食が重なると、なぜか少し気が引けて「今日はわたしが払うから」などと言ってみたりする。よく考えると、わたしのサイフから出ようが、夫のサイフから出ようが、家計からお金が出ていくことに違いはないのだが、ちょっとしたキモチの問題である。

さて、こうして訳了まで数十日、あるいはそれ以上の期間、くる日もくる日もコツコツしているわけだが、几帳面な働き者かというそうではない。実際、訳了した時の解放感はひとしおである。「もう『納期に間に合うだろうか』と心配しなくていいんだ」と思うと、ゆっくりお茶を飲んでいるだけでとても幸せな気分になる。まだ訳者校正や、場合によっては訳者あとがきが控えているとはいえ、ひとまず訳了したという安心感からか、日ごろ睡眠時間を削ることはほとんどないにもかかわらず寝だめを試してみたりする。たとえるなら、エアロビクス後に深呼吸やストレッチでクールダウンするようなものだろうか。「休むも相場」という相場の格言を「休むも仕事」と都合よく言い換えて、ひたすらのんびりするのだ。

だから、コツコツしていない時のわたしは、動物にたとえると日だまりで昼寝をしている猫のつもりである。猫の手が必要な折には声をかけていただければと思う。

もっとも、この「吾輩は猫である」説については家族の理解が得られておらず、「猫ではなくゴマフアザラシではないか」と異論が出ている。どうやら、猫はイザという時はとても敏捷だが、わたしには敏

捷さはないということらしい。たしかに、食べるのも、話すのも、歩くのも遅いと昔から言われている。それにしても、ゴマフアザラシは身近な動物ではないため、どういう生態なのかよくわからないのだが、まんがのゴマちゃんキャラクターは好きなので、あのイメージだったらいいな、と考えるようにしている。

こんなふうに、キツツキのような日常と猫（アザラシ？）のような日常を繰り返しているうちに月日が流れていく。それがわたしの生活である。

こう書くと、とても変化の少ない仕事だという印象を生むかもしれないが、そうではない。原書に描かれた世界は時代も国や地域もまちまちだから、えてして身近で起きる出来事とかけ離れている。かなり壮大な世界と日々向き合っているともいえる。波乱万丈なストーリー展開に手に汗握ったり、泣いたり笑ったり、しんみりしたり、ワクワクしたりしているあいだ、心のスクリーンにはさまざまな情景が去来する。原文を読んで情景を心のスクリーンに映し出し、キーボードを叩くことによってそれを日本語で再現する——これもまた翻訳のひとつの定義かもしれない。毎日とても多くの情報が流れてはうたかたのように消えていくなかでは、ひとつの作品ととことん付き合うこんな濃密な読書体験がいつそう愛おしく感じられなくもない。

* * *

それでは、柄にもなく翻訳の醍醐味について書いたところで、日だまりでの昼寝に戻りたい。



*ここに記したのはあくまでもわたしというひとりの翻訳者の生態にすぎないため、翻訳家に会った時にキツツキや猫やアザラシを連想しないでいただければ幸いです。

**アザラシの名誉のために書き添えるなら、アザラシは水の中では敏捷なようです。

これからの本のかたち

アップル社の iPad の発売を受け、電子書籍がますます注目を集めている。紙の本をめくるような感覚で読め、目も疲れにくいのだとか。

これから電子書籍が携帯電話のように爆発的に普及するかどうかはわからない。本は紙で読むものだと考える人もまだ多いのではないか。紙の本ならではの魅力もあるはず。その魅力が出しきれば、電子書籍に淘汰されてしまうこともないだろう。

紙の本の魅力は、パラパラと拾い読みをしたり、書き込みをしたりしやすいといった実用面だけでなく、視覚、触覚、時には嗅覚にまで訴える感覚的な側面が大きいと思う。

表紙や挿絵に加え、紙質、字体、余白の使い方などの装丁。芸術作品として手元に置いておきたい本ならば、立ち読みやダウンロードだけではあきたらず、現物を購入するはずである。

私個人の好みでいえば、河出文庫の須賀敦子全集や新潮文庫の梨木香歩の本の表紙は、書店のカバーをかけるのがもったいないほど美しい。

そもそも、本の表紙をかくすカバーをかけるのは、日本ぐらいではないか。アメリカでもイギリスでも、書店のレジではペラペラのビニール袋に入れるだけ。5冊まとめ買いしたイギリスの書店で、店員に「袋はあるか」とたずねられたこともある。それだけエコ意識と節約（コスト削減）意識が高いのだろう。

スーパーのレジ袋を断るなら、本のカバーだって断ればいい。私は数年前から「カバーをおかけしますか」と聞かれても断ることにしている。

ところが、代金を用意している間に、カバーをかけないかわりに広告チラシとともにレジ袋に入れてくれたりするので、気が抜けない。カバーを断ったら、間髪入れず「袋も結構です」と言うのがルールだ。

たいてい、バッグに入る大きさの本を買うので、袋は邪魔なだけ。それに、スーパーのレジ袋ならゴミ袋にも使えるが、書店の袋はたいてい再利用できず、ゴミそのものになる。

こんな無駄はなくしていかなければ、「紙を使わないからエコ」とうたう電子書籍派に笑われてしまう。

だいたい、画家や装丁者が精魂こめて仕上げた表紙を、買った瞬間から読み終わるまでカバーでかくしてしまうのは失礼ではないか。

本離れが進んでいると言われていても、電車の中やカフェで、読書する人の姿はよく見かける。だが、たいていはカバーで表紙がかくれていて、何を読んでいるのかわからない。

本の表紙が見えれば、いまどんな本がよく読まれているのかわかるし、珍しい本が目にとまることもあるだろう。本の顔が見えることで、本の文化が活性化するのはではないか。

洋書のペーパーバックや図書館で借りた本なら、カバーなしで読んでいる姿をよく見かけるので、書店で買った本でも、慣れてしまえば、そのまま読むのがあたりまえになるにちがいない。かくしたくなるような本なら、人前で読まなければいいのである。（どうしても表紙だけかくしたいなら、マイカバーをかけるという手もあるが。）

ノーレジ袋運動の次は、ノーカバー運動を。エコ活動家の方々、どうぞよろしくお願いします。

紙媒体の本が生き残るには、アート作品の側面を持つことが大事だと思う。実用書であっても、内容に見合った美しさがほしい。

表紙のデザインのほかに、製本の方法や手ざわり、インクの匂いなど、紙の本の魅力は尽きない。ここで取り上げきれない本のさまざまな魅力については、最近オープンしたウェブサイト「Time with Books 本のある時間」をご参照いただきたい。

<http://www.timewithbooks.com/>

このサイトは J C C カルチャー・ジャパンと大日本印刷が運営し、無類の本好きで私の恩師でもある慶應義塾大学の高宮利行名誉教授が編集長を務めている。

垂涎ものの洋古書を毎月紹介する編集長のエッセイをはじめ、さまざまな分野の専門家による記事は、教育や音楽との関わりをふくめ、あらゆる側面から本にせまっております、本のこれからのかたちを考えるのに役立つ。私も引き続き、このサイトを参考にしつつ、本の未来に思いをはせていきたい。

秋の夜の月待つほどの手すさびに……

悪い癖

子どもの頃、よく母に叱られた。

買い物に行けば八百屋や魚屋の店先の札に誤字を見つけ、テレビをつければアナウンサーの日本語にケチをつける。おたふく風邪のさなかでも、近所のおばさんが同情してかけてくれた「ユウツねえ」のひとつが気になって気になって、「ユウツってなに？ ねえ、ユウツってなあに？」と母親を問い詰める。5歳の子どもの憂鬱とは何かなどと問い詰められたら、誰だってうんざりする。とにかく、幼い頃のわたしは、朝から晩まで言葉いじりをしている可愛げのない子どもだった。

「人の揚げ足ばかり取って！ いやな子ね」と、母はよく顔をしかめていた。

20年後、紆余曲折はあったものの、三つ子の魂なんとやらで、来る日も来る日も原稿を読み耽り、人様の揚げ足を取ることを生業としていた。

それはまったくの偶然からだったが、編集者として読んだ最初の原稿は翻訳だった。当時は右も左もわからず、たまたま見つけたいくつかの誤りを疑問に思い、打ち合わせの席で面と向かって訳者に問いだした。二十歳そこそこの娘にイチャモンをつけられ、プライドが傷ついたのだろう、訳者は烈火のごとく怒りだし、「初版には私の名前を載せないでくれ！」と怒鳴って席を立ってしまった。

これが、翻訳者に接した最初の体験だった。社会人ともなると、揚げ足取りも容易ではないのだと、身をもって学んだ。（そのわりには以降も何人かの翻訳者を激怒させたのだが……）

その後、20年近く単行本の編集に携わった。

八割がたは翻訳書であった。

山岡さんと出会ったのは今から10年前、2000年の11月だった。山岡さんは、電話一本で突然押しかけて行ったわたしを快く迎え、ずいぶん長い時間、丁寧に應對してくださった。その後しばらくして、翻訳に関するニューズレターを新たに配信したいが、どのような形態がいいだろうか、有料がいいか無料で始めようか、そんな話をされた記憶がある。それが今回めでたく100号を迎えた「翻訳通信」（第Ⅱ期）で、もうそんなになったかと思うと、感慨深い。

思えば「翻訳通信」は、お世辞にも順風満帆とは言えなかった編集者生活に活力を与え続けてくれた。揚げ足取りと言葉いじりが好きなへそまがりの編集者など、今日の出版界は必要としていない。よくも悪くも「売れてナンボ」の世界だからだ。ある出版社では、四半期ごとに会議の席上で新刊の損益一覧表が配られた。売れ行きのよい順に、書名と著者名のほか、印刷部数、実売部数、売上高、製造原価、販売管理費、返品率、損益などの数字が並び、ご丁寧にA（重版中）～F（在庫断裁）のランク付けまでされていた。担当編集者の氏名こそ記されていないものの、どの本を誰が作ったかはわかりきっていた。自慢ではないが、毎回毎回自分の作った本が一覧表の下の方にズラリと並ぶのは、なんともいえない気分だった。わたし一人を置き去りにして、会議室全体が足元の砂もろとも海の彼方へと引いていくようであった。

そんな折、月に一度の「翻訳通信」を読むと、まさに溜飲の下がる思いがした。ここにも、へそまがりの揚げ足取り（失礼！）がいた、と勇気がわいてくるのである。そうか、揚げ足取りもここまで論理的・分析的に徹底すれば、知的な考察となる！ 何度そう、勇気づけられたことだろう。もちろん、批判ばかりでなく、優れた翻訳の批評にも触発された。おかしい話だが、学生時代まではずいぶん翻訳書を読んでいたのに、編集者になってからは、忙しさにかまけて個人的な読書が疎かになっていった。疎かどころか、仕事で読む原稿や原書以外、ほとんど読書をしなくなっていた。一読者として素朴に楽しんだ記憶はあっても、プロ意識をもって翻訳を吟味したことはなかった。

「翻訳通信」で取り上げられた作品は、専門外のものでもできるかぎり入手して読んだ。今だから白状するが、岩波文庫の『国富論』も「翻訳通信」がきっかけで初めて、まともに目を通した。仕事以外で原書と翻訳書をセットで読むようになったのも、日本文学の優れた英訳を読んでみる気になったのも、「翻訳通信」のおかげである。好きな作家の作品で、いくつかの訳が出ていれば、それも全部買って読むようになった。「翻訳通信」は多忙で売れない編集者の心強いブックガイドだった。

しかし。そこで一念発起し、苦節〇年の末にミリオンセラーを手がけ……とでもなれば、話としては美しいのだが、残念ながらそうはならなかった。作っても作っても売れない、売れないと何かがいけないのだと思い、自分にはまったくわからない「トレンド」に乗ろうとする。それがどう良いのか、面白いのか、ツボを心得てもいないのに、「こうすれば売れませ〜。間違いありまへん」と嘘八百のプレゼンテーションをする。企画は通る。しかし、好きでもなければ良いと思ってもないのだから、売れる本になるわけがない。たまに「これは！」と思う作品にめぐり合っても、またそういうのにかぎって、目も当てられないほど売れないのだった。

仕事そのものがつまらなくなり、意欲もなくなり、売れるものはますます作れなくなり、ノルマはますます重くのしかかる。著者や訳者に合わせる顔もない。ちょっとソロバンをはじけば、給料分も稼げていないことは明らかだった。在籍しているだけで給料をもらえることが、薄気味悪い気がした。いつしか、サラリーマン編集者を続けることは、自分にとって時間の無駄以外のなにものでもないと思うようになっていた。そして――。

ついにあるとき、亭主に頭を下げ、悠々自適の主婦業へと鞍替えしたのだった。

ところがである。晴れて本の売れ行きを気にせずとも、肩身の狭い思いをして給料をもらわずともなくなったというのに、なかなか悠々自適とはいかなかった。経済的な逼迫もさることながら、家計を助けるためにはそばそとはじめた翻訳やら執筆やらが、生来の悪癖をふたたび目覚めさせてしまったのだ。今度は、自分で自分の揚げ足取りをする羽目になったのである。

翻訳に取りかかれば、これだ！という日本語を探り当てるまで、トイレでも風呂場でも悩む。どう見ても中学生レベルの英単語しか並んでいないのに、うんうん唸ってもまともな日本語にたどり着かない。なんとかたどり着けたとしても、締め切りが近づくと脳味噌が沸騰しそうな勢いで何度も読み返し、どうでもいい手直しを繰り返す。

原稿を頼まれれば、これまでの人生で耳にし目にしたさまざまな「文章作法」が走馬灯のように脳裏をよぎる。いわく「第一行目には『が』を使わない」、「～して、～して、と『て』でつながない」、「人称代名詞はなるべく少なく」、「接続詞もなるべく少なく」、「形容詞も副詞もなるべく少なく」、

「文末が単調にならないように」、「『の』を重ねるのは2つまで」、「慣用句は陳腐にならないように」、「『のだ』を濫用しない」等々……。これでは一文字も書けないではないか！とだんだん腹が立ってくる。

なんのことはない、英単語のせいでも文章作法のせいでもなく、未熟さゆえの万年スランプだ。

編集者時代から、スランプに陥ると目先を変えて「生きた言葉」に触れるようにしていた（売れない本しか作れない編集者にも一人前にスランプはあった。書名を決められない、帯のコピーが浮かばない、等々）。町をぶらぶら歩いたり、喫茶店でオバちゃんたちの会話に耳をそばだてたり、電車のなかで女子高生の会話に耳を傾けたりする。そういうときに聞こえてくる言葉には二心がない。読者にアピールしようとか、上司のウケを狙おうとか、名文だとか名訳だとかいう密かな自負も、もちろんない。驕りは驕りのまま、ウケ狙いはウケ狙いそのまま、皮肉は皮肉、下心は下心、むきだしでミエミエだ。そのむきだしさに、なぜか安心し、気分が軽くなった。生身の人間の逞しさに触れ、机上の悩みがちっぽけなことに思えた。運がよければ、会心の――と思っているのは本人だけだが――フレーズが思い浮かんだ。運がなくても、「まあ、この頭をこれ以上捻ったところで大勢に影響はないな」と、とりあえず一仕事片づけることができた。

今では、毎日の散歩、とくに駅前の商店街をぶらつくのが恰好の気分転換、スランプ脱出法となった（なにしろ“万年”スランプだから、毎日脱出を試みなければならないのだ）。魚屋の店先に「ツヅミ 525 円」という手書きの札を見つけても、揚げ足を取るような不粋なことはしない。シとツが間違っているが、それが何だというんだ。微笑ましい光景ではないか。腹の足しにもならない「言葉いじり」なんぞで飯を食っていると、魚屋のお兄ちゃんがまぶしく見えてくる。シジミを買って、さあ、また一仕事！という気になる。

ぶらりと外出するわけにいかないときは、テレビをつける。観るためではない。とにかくも「喋っている人間」の言葉を聞くためだ。しかし、このテレビというやつは、魚屋のお兄ちゃんとは違って、曲者だった。せっかく穏やかに生きられそうだったのに、テレビのおかげで揚げ足取り気質が、また火を噴いたのだ。

「させる」コレクション

最初にその表現に違和感を覚えたのはいつだったろう。

正確にはわからないが、気になりだしたのは2、3年前だと思う。当初はもっぱらテレビで見聞きし、そのたびにイライラしていた。活字になったのを目にしていれば、アマゾンのレビューに「日本語がない」くらい書き込んだだろう。しかしそんなレビューを書いた覚えはないので、自分の読む本には出てこなかったのだと思う。もし、編集者として担当した原稿にこの表現があったら、一も二もなく赤を入れる、そういう表現である。

この半年ほどは、出くわすと反射的にメモをとるようになった。生理的に受けつけない言い回しなので、初めは苦々しく思いながら、あくまで「誤用」の例として記録していた。そのうち、あまりにも頻繁に耳にするため、たんなる誤用として見過ごすことができなくなった。そして、ある時期からその表現は、「言葉は生きもの」というフレーズを引き連れて登場するようになった。もはや、使っている当人たちにとっては「誤用」ではないのではないのか、との疑念が頭をもたげてきた。

そのまったく気に食わない言い回しは、意識すればするほど蔓延ぶりが目につくようになり、ついには新聞紙上に登場した。

その表現とは「〇〇させる」という語法である。

以下に、これまでに収集した「させる」コレクションの一端を列挙する。（記録した日付順）

- a. 全米の女性を元気にさせるミュージカル（映画「マンマ・ミーア」のキャッチコピー）
- b. 修復中の作品を安全な場所に移動させる作業に入る（NHK、昼のニュース）
- c. 神戸港のコンテナを他に移動させる必要がある（テレビ朝日、夜の報道番組）
- d. 肌思いは肌に密着させない（ソフィCM）
- e. いつもの柏木なら何としても続行させていたと思います（フジテレビ、昼のドラマ）
- f. このひと手間がおいしくさせるポイント（TBS、朝の情報番組）

g. 地域を活性化させている商店街があります（テレビ朝日、昼の情報番組）

h. 世相を反映させたトリンプのブラジャー（日本テレビ、昼の情報番組）

i. 新陳代謝を活発にさせるアミノ酸を豊富に含んでいます（小学館、食の医学館）

j. ジャガイモを長く保存させる方法は？（グリーンCM）

k. 洗い流しやすくさせる働きがある（朝日新聞）

l. 2020年までに核兵器のない世界を実現させるべきだ（NHK、昼のニュース）

もちろんお気づきだろうが、上の a.~l. の「させる」「させ」は、すべて、「する」または「し」が“正しい”。（言い切っているのか?? ドキドキするなあ……）

- a. 元気にする
- b.,c. 移動する
- d. 密着しない
- e. 続行して
- f. おいしくする
- g. 活性化している
- h. 反映した
- i. 活発にする
- j. 保存する
- k. 洗い流しやすくする
- l. 実現する

（ウン、やはりこちらが正しい！ みなさんもそう思われますよね??）

これらはすべて、「体言、形容詞の連用形、形容動詞の連用形、漢語、外来語」などを語幹とし、「する」をつけた複合動詞である。活用形はサ行変格活用をとる。説明はややこしいが、古くは「す」（「心す」——徒然草など）、現代では「する」をつけて、とりあえず何でも動詞にしておもうという便利でシンプルな語法だ。プレゼンする、残業する、評価する、明るくする、執筆する、翻訳する、編集する……。 「する」に頼った複合動詞なくしては、世の中が回らないのではないのかというくらい、どこにでもある語法だ。いったいなぜ、この子どもでも使いこなす「〇〇する」を、「〇〇させる」と

する必要があるのだろうか？ 「させる」にすると意味上のどんな違いが生まれるのだろうか？ わたしの頭が悪すぎるのかもしれないが、もう何か月も考えているが、まったく、さっぱり、わけがわからないのである。

文法的には、「〇〇させる」は、語幹＋サ行変格活用「する」の未然形「せ」＋助動詞「させる」＝「せさせる」の省略形（または語幹＋「する」の未然形「さ」＋助動詞「せる」）と考えられる。「させる」も「せる」も一般に、使役（放任、許容）の意味で使われる（高度な尊敬の意味もあるが、日常使うことはないのでここでは論じない）。したがって、「〇〇させる」は以下のような場合にはもちろん正しい。「息子に掃除させる」（使役）、「勝手に執筆させておく」（放任）、「海外出張させてもいい」（許容）。当然だが、使役し、放任し、許容する主体と、〇〇する主体は別、ということになる。そこで、a.～l.を文法にのっとって解釈してみる。

- a. 全米の女性を【無理やりにでも】元気にさせるミュージカル（使役）
- b.,c. . . .（意味不明。誰かに移動させる？）
- d. 肌思い【というナプキン】は【肌に密着しがちなナプキンという代物を】肌に密着させない（許容の否定）
- e. ……柏木なら何としても【、チンピラを使っても】続行させていた……（使役）
- f. . . .（お手上げ）
- g. . . .（言語道断。あきらかな間違い）
- h. 【開発チームが苦心の末ブラジャーをして】世相を反映させたトリンプのブラジャー（使役？）
- i. . . .（事典がこれでは……）
- j. . . .（……ゲームの日本語は悲惨だ）
- k. . . .（校閲は何をしているんだ）
- l. ……【嫌がる核保有国の首脳たちを椅子に縛りつけてでも、彼ら自身に】核兵器のない世界を実現させるべきだ（使役？ 心情はわかるが……）

「あなたの夢を実現させる」

この「させる」コレクションは順調に増え続けており、文字通り枚挙に^{いとま}遑がない。小一時間もテレビ（とくに報道、情報番組）をつけていれば、必ず出くわすといってもよいくらいだ。今のところ王座に君臨するのは、わたしの収集したかぎり「（夢を）実現させる」という使い方だ。ちなみに、グーグルで「夢を実現する」と「夢を実現させる」の双方を検索すると、前者が 358,000 件、後者が 592,000 件であった。嗚呼……！（8月10日現在の数字）

実はわたし自身も、「夢を実現させる」の持つニュアンスをうすうすは感じとっている。耳になじみすぎ、違和感一辺倒ではなくなってきた。慣れとは恐ろしいものだ。

一時期、「〇〇させていただきます」の濫用が話題になったが、「夢を実現させる」と「〇〇させていただきます」には、何かしら通低するものがあると感じている。

「させていただく」は、当然責務として「します」「いたします」と言うべきところを、「仕方なく」（使役）、「偉い人に指名されて」（許容）、あるいは「勝手に」（放任）などの意味をもつ「させて」にさらに「いただく」をくっつけてへりくだってしまったものだから世の知識人の非難をいっせいに浴びた。責任を回避する表現のようでもあり、主体性を積極的には肯定しない「逃げ」の表現ともとれる。「いただく」などとへりくだっているが、本心は得意満面なのではないか、何でもかんでも「させていただく」はないだろう、^{いんぎん}慇懃無礼な奴め！と、怒りさえ買ってしまった。（余談だが、「させていただく」が問題視されて以来、使うべき文脈でも怖くて使う気がしなくなった。だから、わたしのような小心者には誤用・濫用は迷惑なのだ）

話をもとに戻そう。

「夢を実現する」といえば、主体はたぶん「誰か」だろう。誰かが「夢」というまだ現実にはなっていないものを、現実のものにする、ということだ。

では、「夢を実現させる」はどうだろう。使役でも放任でも許容でも、実現する（＝現実のものにする）主体と、使役・許容・放任する主体は別だから、「わたしがあなたをして、あなたの夢を実現させよう」と、これはまったく正しい。この意味で使うかぎりにおいて、「実現させ」は「実現し」に置き換えることができない。「実現し」と言ってしまったとたん、夢を実現する主体は「あなた」ではなく「わたし」になってしまう。

しかし現実には、「夢を実現させる」はほとんどのケースで「夢を実現する」に置き換え可能である。つまり、使役でも許容でも放任でもない「実現させる」が幅をきかせつつあるのだ。その心は、あまりにも夢を実現しにくくなった現代の世相を反映しているのかもしれないし、自力で実現するのはとても無理、秘訣や道具や技能に頼らざるを得ないという情けない状況を映しだしているのかもしれない。

また、別の角度から考えると、夢を主語とした自動詞としての「夢が実現する」が成り立つことから、夢自身をして顕現させる、という使役の意味合いがこめられているのかもしれない。まるで、夢はどこか自分の外に転がっていて、それを拾って（買って？）くれば、夢君みずから姿を現してくれる、とでもいうように。穿ちすぎかもしれないが、「あなたの夢を実現させる」などという惹句を目にすると、不平と不満は達者だが覚悟も度胸もない脆弱な若者がこういうのにひっかかるんだろうな、と思ってしまう。こんなひねくれた考えをもつのはわたしだけかもしれないが。

あと何年かしたら、助動詞「させる」、「せる」の新たな用法が定義されているかもしれない。いわく、「物や事がある状態から別の状態にすること。実現させる、移動させる」――。

しかし現行の国文法では、「夢を実現する」と言い切るしかないのだ。

活字になった「実現させる」

「言葉は生きもの」だ。

世相を反映して新しい表現が生まれることもあるし、勘違いや聞き違いが訂正されないまま使われ続け、長い年月を経るうちに、誰もその「正しさ」を疑わなくなること多い。誤用が濫用され続けると、「正しいのはこっち」と主張し続けても、「それはもう古い、間違いだ」と指さされるようになる。

言葉を使って仕事をしている以上、正しいからといって誰にも通じない言葉で原稿を書けば、（芸術作品でもないかぎり）不良品を納品したも同然だ。意に染まない表現でも、それが世の大勢を占めるようになれば、従わざるを得ないこともあるだろう。それに、「ではいったい、どこから、いつから誤用は慣用になり、正しい言葉と認められるのか。言葉の正しさの根拠とは何か」と訊かれたら、わたしにも答えようがない。学者や役人がお墨付きを与えれば「正しい」わけではないし、今のように新しい言葉がどんどん増える時代には、辞書に載ったら「正

しい」わけでもない。まして、新聞で使われたら「正しい」わけでもないことは先の例でも明らかだ。

今回、この原稿を書くにあたって、「実現させる」がどれくらい活字の世界を侵蝕しているかを調べてみた。ほんの手すさびのつもりで、面白半分を試してみたのだ。さして興味深い結果は得られないだろうと“楽観”してもいた。活字の世界はテレビの世界とは違うはずだ、と。ところが実際に調べてみると、予想外に面白い結果になった。

次頁に、アマゾンの詳細検索の結果をまとめてみた。調査方法はいたって単純で、アマゾンと書の詳細検索ページのキーワード欄に「実現させる」と入力し、ヒット数を調べた。書名に使用されている例もあったので、書名欄にも「実現させる」を入力して検索してみた。いずれも、ほかの項目は未入力のまま、出版社名だけを変えて検索した。社名の入力ミスがないかどうかを確認するため、総点数も同時に調べた。次に、念のため「実現する」も同様に調べた。まさかとは思ったが、グーグルの例もあるので、ドキドキしながら検索した。（だんだん、この出版社ならこんな感じだろうとアタリをつけて検索するようになった。趣味のよい遊びとはいえないが、なかなか面白い体験だった）

なにも、犯人探しをするつもりではないので、関係者の方々も気楽に面白がっていただきたい。

なお、対象としたのは 2009 年ジャンル別年間ベストセラー（トーハン調べ）の 10 位までにランクされた各社と、2010 年 8 月 15 日現在のアマゾンと書ランキング 100 位まで、8 月第 2 週現在の紀伊國屋、ブックファースト、丸善、文教堂の週間ベストセラー 10 位までにランクされた各社である。紙幅の都合で社名を短縮（欧文）表記した出版社もある。

ただし、キーワード検索で有効な数字が得られない出版社は除外した。アマゾンにも確認したが、出版社が「なか見検索」用のデータをアマゾンに提供していない場合、キーワード検索は書名検索と同じ結果になる。「なか見検索」機能用に目次や本文（一部）データを提供している場合のみ、それらのデータを含めた検索結果がキーワード検索に反映される。指定したキーワードが何ページに引用されているかが表示されるのは、あくまでも「なか見検索用」データを検索した結果だ。データを提供するかどうかは出版社側が決めているようで、いっさい提供しない出版社もあれば、本によっては提供するという出版社もあるとのことだった。

出版社名	書名 させる	書名 する	キーワード させる	キーワード する	総点数
文芸社	0	5	295	716	37835
PHP	2	25	284	1226	17970
サンマーク	0	4	77	188	1583
ダイヤモンド	5	24	39	280	14003
総合法令	1	2	37	139	1200
中経出版	0	8	28	136	3700
日経BP	4	11	28	338	6146
フォレスト	2	2	25	77	459
あさ	0	1	24	75	516
かんき	0	6	21	68	1666
講談社	2	5	20	85	107839
WAVE	0	0	13	46	572
DISCOVER	0	1	12	57	786
阪急	0	0	12	69	2208
すばる舎	1	0	11	30	988
祥伝社	0	4	10	51	5929
大和書房	1	1	10	27	3672
東洋経済	0	11	10	157	9017
文藝春秋	0	0	10	59	18396
角川書店	0	1	9	40	35084
きこ書房	0	1	9	15	290
青春出版社	0	1	8	18	4351
飛鳥新社	0	0	7	32	1025
宝島社	0	2	5	24	8191
徳間書店	0	4	4	42	19034
幻冬舎	0	1	4	7	7616
マガジンハウス	0	1	4	7	3387
日経出版	0	1	3	31	1702
経済界	0	6	1	22	1194
光文社	0	4	1	16	13244
集英社	0	0	1*	25	48385
中公新社	0	0	1	10	8241
ポプラ社	0	0	1	2	13598
主婦の友社	0	2	0	29	8521
小学館	0	0	0*	10	59570
新潮社	0	0	0	5	27347
日経新聞	0	0	0*	3	8587

※キーワード検索で「実現させる」の多かった順に表示

※*の数字は、明らかに正しい用法を除外した結果

※DISCOVER はディスカヴァー・トゥエンティワン

左から出版社名、書名検索「実現させる」のヒット数、同「実現する」のヒット数、キーワード検索「実現させる」のヒット数、同「実現する」のヒット数、総刊行点数となっている。表示順はキーワード検索で「実現させる」の多かった順である。

書名にしてもキーワードにしても、「実現する」とすべき場合にどの程度の頻度で「実現させる」を使っているかという誤用率?の一端を垣間見ることはできそう。厳密さを期すなら、「すべての『実現させる』が誤用」であることを確認すべきだが、一件ずつ吟味する時間的余裕はなかったことをお断りしておく（一部、ヒット数が少なかった出版社については、正しく使われている「実現させる」を除外した）。

ほかにも、いくつか強調しておきたい点がある。

第一に、キーワード検索のヒット数が多いということは、それだけアマゾンという販路を重視し、まめにデータを提供している証拠だ。自費出版中心の出版社であれば、書店に流通しにくい、宣伝にお金をかけられない、著者へのサービス業務である、などの理由からアマゾンを最大限活用しようとするのは当然だろう。

第二に、「実現させる」「実現する」という表現は、自己啓発やビジネスの分野で頻繁に使われる。PHP 研究所などは、「〇〇を実現する」ための本を出すのがある種“使命”だろうから、他社に比して分が悪いといえる。逆に、文芸やエンタテインメントなどを得意とする出版社では、そもそも「実現する」という表現が登場しない作品も多いだろう。

また、よくよく吟味すると、予想に反して 1990 年代以前の本がかなり含まれていた。わたしの感覚では、この 5、6 年のことという印象だったので、意外だった。中には、1991 年の一冊だけがヒットしたという例もあったが、敢えて除外しなかった。（時間がなかったというのもあるが、数字を加工しだすといくらでも恣意的な結果を導けると感じたからだ）

この表から何を読み取るかは人それぞれだろう。

頭の体操と思って楽しむこともできる。東洋経済新報社の場合、「実現する」とすべき 167 回の機会のうち、10 回くらいは「実現させる」になる可能性がある（5.98%）。同様に、文芸社の場合だと、1011 回の機会のうち、295 回くらいは誤用になるわけで（29.17%）、さすがにこれは「うっかりミス」のレベルを超えている。

しかし、出版人の目で見れば、うっかりミスのレベルを超えているのは、むしろ書名に「実現させる」を使用している各社のほうだとも言える。本文をチェックするのは普通、著者（訳者）、編集者、校正者、印刷所のオペレーターなどだ。担当編集者

の上司がチェックする場合もあるが、ざっと目を通す程度だろう。

書名はそうはいかない。企画書を書く段階から、書名は大勢の人の目に触れる。編集会議の場でも「もう少し売れそうな書名を考えろ」などと議論の対象になるし、刊行予定表には何か月も前から掲載されることもある。最終案ではないにしろ、『(仮) あなたの夢を実現させる 100 の言葉』のように、何らかの書名が必ず告知される。つまり、書名に「実現させる」を使用した各社では、刊行までに何十人もがそれを目にしていたということだ。出版社の人間が何十人も目にしていて、「これは日本語としておかしいのではないか？」との疑問が出ないことがわたしには信じられないが……、とにかく、状況としてはそういうことだろう。

常識的に考えて、書名に「誤植」があつたら全部刷り直しだから、「実現させる」は各社にとって誤用でも誤植でもないということになる。読者にアピールする正しい表現なのだろう(皮肉でいっているのではない。そうとしか考えられないのだ)。誰もが知る著名人の著作も含まれているので、著者が偉すぎて誰も意見できなかったのかもしれない。

ここにカウントされた本のなかには、ベストセラーも含まれている。一般の読者からすれば「多少の誤植があっても、本の売れ行きには関係ないらしい」ということになるだろう。出版社の側からも、「それで通用するんだから、売ればいいじゃないか。法律に違反してるわけでもあるまいし」という声が聞こえてきそう。

しかし、もう一度繰り返す。「〇〇を実現させる」は誤植ではない。かなり頻繁に使われるようになった「誤用」(今のところ)である。調査したすべての出版社で、「実現する」を採る傾向にあることは明らかな。仮に、文芸社の結果に素人原稿の拙さがストレートに反映されているとすれば、言葉のプロでない書き手ですら、七割は「実現する」を採っているということになる。やはり、「〇〇を実現させる」を正しい日本語だとするには、まだ躊躇を禁じ得ない。

とまあ、たんなる手すさびにしていはいぶん楽しめた。読者のみなさんにも、想像力を逞しくして、「へえ〜」、「ナルホド」、「ほう〜」と、苦笑したり納得したり感心したりしていただければ幸いだ。

言葉をいたわる

今回、この原稿を書くにあたり、ある友人に「させる」コレクションの話をした。すると友人は、「そういうことならぜひ、これを読むといい」と、一篇の戯曲をすすめてくれた。明治 44 年発行の『誤用便覧』(大町桂月、佐伯常麿)に森林太郎が寄せた序文「鸚鵡石(序に代ふる對話)」である。校正の現状とあり方について、言葉の取り扱いについて、著述家と出版人との対話形式で論が展開する、一風変わった序文とのことだった。

インターネットで検索すると、驚いたことに「鸚鵡石(序に代ふる對話)」全編を正字・正仮名遣いのほぼ原文通りの表記で読めるサイトが見つかった(<http://www.hat.hi-ho.ne.jp/funaoto/bunko/bunko.html> (『鸚鵡石』のpdfファイル))。深夜に、携帯メールで本の詳細を送ってもらい、インターネットで検索すれば、ものの 5 分とたたないうちに 101 年前(!)の出版物がほぼ原文通りのスタイルで読めるとは……! 世の中の変化も悪いことばかりではない。へそまがりのわたしでも心底、感動した。

そして、「鸚鵡石(序に代ふる對話)」を読んでまたまた深く感動し、原稿を書く前に読んでおいてよかった! と、胸をなで下ろしたのだった。そこには、わたしの言いたいことのすべてが言い尽くされており、加えて、鋭い描写と深い考察と辛辣なユーモアが満ちていた。この作品をここで紹介できただけでも、「させる」コレクションに勤しんだ甲斐があつたというものだ。

言葉は、それで飯を食っている人間にとっては、職人の道具のようなものである。料理人が一日の終わりに必ず包丁の手入れをするように、書き手も編集者も、言葉をいたわって(この表現は「鸚鵡石」より借りた)使わなくてはいけない。一流の料理人が、料理を味わう者に道具や工程を意識させないがごとく、一流の書き手は読者に言葉(尻)を意識させることなく、「内容」をいきいきと伝える。情景や心情を、まるで言葉が介在しないかのごとく、ありありと伝える。そしてしばしば言葉以上のものを伝える。そういう表現には揚げ足取りのつけいる隙がない。これは翻訳においても、目指すべき境地だと思う。一生かかってもたどり着けないかもしれないが、日々、精進あるのみである。使い込まれた道具が職人の手足となるように、知り尽くした言葉を肌身の延長として、自在に使いこなしたいものだ。

少し長くなるが、「鸚鵡石(序に代ふる對話)」を引用して締めくくりとしたい。

「鸚鵡石（序に代ふる對話）」より抜粋

※＜＞内、ルビ、太字は筆者

＜客は出版人、主人は著述家。樂文館は印刷所でもあり出版社でもある。主人は、口述で翻訳し、秋汀なる人物に筆記させた原稿を雑誌に連載していたが、このたびそれを単行本『鸚鵡石』にまとめて刊行する運びとなった。主人は、樂文館が自分の赤字の通りに植字しないばかりか、赤字に対して意見してきたと憤慨している。＞

＜……………略……………＞

客。へえ。妙な事が起つたものですね。さうして見ると秋汀君と樂文館とが同じ文字の使ひやうをしてゐて、先生丈が違ふといふ事になるやうですが、さうなのですか。

主人。まあさうなのだ。

客。一體どんな字が、さういふ風に違つてゐるのですか。

主人。（校正刷を机の側に積んである書籍の間より出す。）これを見てくれ給へ。一番澤山ある此の「申す」といふ字なんぞを見給へ。これが雑誌には皆「まをす」とルビを振つてあるのを、僕が「まうす」と直して遣つたのだ。それを初校に皆「まをす」にしてゐる。又直して遣つても、再校にも直つてゐないで、この通「まうすは聊^{いささか}へんなる様存候」と冷かして書いてあるのだ。

客。はゝゝゝ。成程これは妙ですね。併し先生が「まうす」にお直しなすつたのは、どういふわけですか。

主人。どういふわけも何もない。僕だつて「まをす」が誤でない事は知つてゐる。知つてゐるどころではない。明治になつてから「まをす」を不斷使ふやうに復活させたのは、多分僕だらうと思ふ位だ。國民新聞なんぞへ、和文らしい文章でいろんなものを書いた頃は、友達が「まをす」は可笑しいと云つて冷かしたものだ。併し談話體のものに「まをす」と書かれると、どうも心持が悪い。祝詞を讀むときは、今でも「まを一す」とはつきり讀むのだ。僕はあれを思ひ出す。談話には誰だつてあんな事を言ふものはない。「もおす」と發音するではないか。音便で「まうす」と書くのが當前だ。他の例を考へ

て見給へ。箒は「ははき」だ。併し談話體には「はうき」と書いてもらひたいのだ。「ほうかむり」（頬冠）を「ほほかぶり」と書かれては溜らない。果して樂文館が一切の音便を排斥するのなら、何故「いうて聞せて下さりませ」といふせりふを其儘植字するのだ。「いひて聞せて」と直さなければならぬ筈ではないか。

客。成程さう云はれればそんなものですが、「まをす」と書いてあつたつて、讀めないことはありませんなあ。

主人。勿論さ。讀めない事はないから、雑誌の時は僕も直さずに置いたのだ。併し讀めない事はないから好いなんと云ふのは、藝術的良心の弛廢だからねえ。

客。いやはや。大變なわけですね。あ。（間。）そして眞名の違ふといふのはどんなのですか。

主人。嘘字は雑誌の時に大抵直してあるから、これも讀めないことはないといふ程度の間違なのだ。

「身に染む」といふ時に、「沁」の字をどこかの漢學の素養のある人が使つたのを見て、今では誰も彼も「泌」の字を使ふ。お醫者さんが「分泌」などと云ふ時使ふ字が、飛んだ處に濫用せられてゐるのだ。こんなのは、僕は雑誌でも容赦はしない。其外「中有に迷ふ」といふのを「宙宇に迷ふ」なんと書くのが普通だ。佛説の三有なんぞを知つてゐるものは少い^{しかた}のだから爲方が無い。こんなのも雑誌の時から無いやうにしてある。（校正刷を指さす。）一寸これを見給へ。これは博奕の「さい」なのだ。雑誌にはウ冠の「賽」といふ字が書いてあつた。それを僕は采色の「采」に直して遣つた。秋汀君の書いた方が、無論世間普通の字だ。誤りではないかも知れない。併し僕は采色の「采」の字の方の由來を知つてゐて、ウ冠の「賽」の字の方は、何故博奕の「さい」に使はれることになつたのか知らない。由來を知つてゐる字の方が心持が好いから直して遣つたのだ。これも朱書が附いてゐる。「采は何かの間違と存候」といふのだ。これなんぞは最も驚くよ。采色の「采」といふ字が何も僻字^{へきじ}といふわけではない。言海にだつてウ冠の「賽」と並べて出してあるのだ。僕は漢字に對する専門の智識は有してゐないのに、此頃は忙しくてなかなか文字なんぞを調べてゐる暇はない。それだから人の書いた字を直さうとは思はない。樂文館は僕の書く字を直さうとするのだから言海位は開けて見たつて好いではないか。（又校正刷を指さ

す。)それからこれを見てくれ給へ。雑誌には「わけ」といふ字が皆翻譯の「譯」といふ字になつてゐた。これは世間普通には相違ない。併し僕には翻譯の「譯」の字に、何故「わけ」といふ義があるか分らない。そこでこんな字はなる丈假名で書きたいのだ。併し假名にするのが煩はしい處は、爲方がないから要訣の「訣」の字に直して置いた。誰の説だつたか覚えてはゐないが「わけ」といふ詞は、もと眞名で「訣」と書いたものらしい。それを傳譯の「譯」の字の省文で、言扁に「尺」といふ字を書く「譯」の字と見違へて、それを又正字の「譯」にしたのだらうと云つた人が有る。何にしる説文に訣は法なりと云つてある「訣」の字には、多少「わけ」といふ詞に當つた處がある。これに反して「譯」といふ字がどうして「わけ」といふ詞の眞名になるのだか、僕には少しも分らない。僕は分らない字は使ひたくないのだ。それを樂文館ではどうしても翻譯の「譯」の字が本當だから、それを使はなければ承知しないといふので、此通に朱書をしてよこすのだ。僕が假名にして置いた處まで、此通に「譯」の字に直してよこすのだ。まあ、ここいらが最も樂文館のお氣に入らない處なのだよ。

客。なる程。承ればそんな理窟もあるのでせう。併し先生のやうなねぢくれた考が、樂文館に分らないのは無理はありませんねえ。

主人。それは無理だとは僕も思はないのさ。併し僕は活板屋に對しては、僕の書いたものを分らして貰はうとは思はないのだ。活板屋は僕の書くとほりに植字をしてくれれば好いのだ。譬へて見れば、畫家や彫刻家に物を頼むのなら、先方に製作の自由を與へねばならない。それでさへ Rodin の拵へた Balzac のやうに、注文した方で嫌だと云へばそれ迄だ。職人に物を頼むのに、注文どほりに遣らなけりやあ、其品物を引き取らないと云つても差支あるまい。もう少し進んで考へて見れば、活板屋といふものは著述家の書いて遣るとほりに植字をしなけりやならないのではあるまいか。それが活板屋の義務ではあるまいか。

客。(微笑して頭を傾く。)先生のやうに考へると、活板屋は著述家に服従せねばならないやうに聞えるのです。活板屋は著述家の奴隸でなければならぬやうに聞えるのです。甚だ失禮ですが、其邊はどうでせうか。餘りお話が抽象的になりますから、具體的に樂文館の事を言つて見ませう。樂文館は活板業はしてゐますが、同時に書肆ですよ。今日事實の上

では、書肆が著述家の奴隸でせうか、著述家が書肆の奴隸でせうか。(客の顔は Irony の色を帯びてゐる。)

主人。はゝゝゝ。君はなかなか辯論家だなあ。僕のさつきのやうに云つたのは著述家としての立場から極言したのさ。僕だつて世間に對して丸で盲ではないよ。世間はさう窮屈なものではないからなあ。勿論樂文館はえらいよ。併し僕が若し書肆になつたり、活板屋になつたりしたら、もつとえらいかも知れない、<……中略……>

客。<…略…>(間。)さてわたくしの方の實際問題ですが、此の一件の落着はどう附けて下さるのですか。わたくしの方から印刷所へ掛け合つて、これからは誤植は十分直すといふことにさせれば好いでせう。

主人。いや、僕はもう御免だよ。君はまだ誤植だなんと云ふが、それでは君には僕の説明が好く分つてゐないといふものだ。誤植といふものは過誤なのだ。誤植の事は僕は言つてはゐない。(校正刷を指さす。)これを見給へ。ここに「ぢつとしてゐらつしやいよ」とわ行のみが植わつてゐる。こんなのは僕は雑誌の時容赦なく直したから、初からあ行のいになつてゐる。それを印刷所でも大抵あ行のいに植ゑてゐるが、ふいところ丈間違つたのだ。こんなのは誤植だ。それだからこつちの再校の方を見給へ。先方でも直してゐる。

客。(校正刷を覗き込む。)なる程。皆いろはのいになつてゐますな。何故いらつしやいといふ時、わゐうゑをのみでは行けないのですか。

主人。知れ切つた話ぢやあないか。いらつしやいといふのは「入らせられい」から轉じたのだ。眞名に書けば「入」の字だ。「居」の字の筈がない。

客。それでも誰の小説を見ても、皆わゐうゑをのみを書くか、「居」の字を書くかしてゐるぢやありませんか。

主人。それはさうなつてゐるよ。「おいでなさい」も同じ事だ。「御出なされい」だから、眞名に書けば「出」の字で「居」の字ではない。それを大抵皆わ行のみや「居」の字を書いてゐるのだ。

客。何故さういふ風になつたのでせう。

主人。それは知れてゐるさ。入らつしやいもお出なさいも居ろといふ事だと思つて「居」の字にしたのだ。言語の上の猿智恵なのだ。言語の感情といふものを失つてゐるのだ。

客。いつからさうなつたのでせう。

主人。たつた此間からだよ。僕が始て氣の附いたのは硯友社の人の小説であつた。それから一人殖え二人殖えして、「うゐらつしやい」、「おうゐでなさい」流が天下を取つたのだ。

客。はゝゝゝ。先生は随分馬鹿氣た事を氣にしてゐるのですねえ。

主人。（微笑。）失敬千萬な。何の馬鹿氣た事があるものか。眞面目に文藝を遣つてゐる以上は、言語はいたはつて使はなけりやならない。僕なんぞは人の著述を開けて見て、「うゐらつしやい」のやうな猿智恵の化身がうようよしてゐるのを見ると、體がむづ痒くなるのだ。

<……………中略……………>

客。どうも困りますねえ。

主人。それは君の方では少しは困るだらう。僕だつて君の方で多少迷惑するといふことは知つてゐる。併し僕もいやいやながら鸚鵡石を一旦本にするといふことを承知して、忙しい中で随分手数を掛けたのをむだにするのだ。君も我慢して止めてくれ給へ。

<……………中略……………>

客。先生。それは悪い笑談といふものです。（間。）そんな馬鹿な事を言はないで、何とか始末の付けやうがありさうなものですねえ。

主人。（Irony の調子。）さうさなあ。君が立つて困るといふなら、僕に考がないこともないよ。

客。（膝をすゝむ。）どうするのです。

主人。先づかうだ。君は樂文館へ往つてかう云ふのだ。さて此度は意外な事で、御迷惑を掛けて相濟まない。併しわたくしも鸚鵡石を出板することを受け合つたときには、その中に博奕の「さい」を采色の

「采」に書いたり、「わけ」といふ字に「訣」の字が當てゝあつたりするやうな、へんてこな書物だといふことは夢にも知らなかつたのだ。そんなへんてこな書物を出板しようと受け合つたのはわたくしの災難だ。そこで著者の方へも、十分掛け合つて、出来る事なら、ウ冠の「賽」の字と翻譯の「譯」の字とにして貰ひたいと云つて見ましたが、著者が分らず屋で、どうしても納得しない。わたくしもこれでこずつたから、二度とふたたびあんな男の書いた物を出板しようとは思はない。馬鹿に附ける藥はない。どうぞあなたの方でも我慢して、此度は著者のいふ通に、間違つた字でも構はないから、植ゑて遣つて下さいとかう云ふのだ。はゝゝゝ。

客。はゝゝゝ。好うございます。今から往つて、何とか云つて纏めて來ませう。左様なら。

<了>

以上、「鸚鵡石（序に代ふる對話）」より

※なお、「鸚鵡石」のテキストは船木直人氏のホームページよりデータをコピー、ペーストしたのち、一部の漢字を表示環境に合わせて新字に改めました。データの借用を快諾してくださった船木氏に、この場を借りて御礼申し上げます。

■ 北 辰 堂 ■

◆ アレクサンドラ・ストッダード／若林暁子訳 ◆ 四六判／定価 1575 円

「わたしはこうあるべき」「あれも、これも、なくてはならない」と自分を型にはめようとしたり、誰かと比較し続けたりすれば、「幸せ」を感じることはできません。あなたの人生の主役は「あなた自身」です。「これが、ほんとうのわたし」という内なる声に耳を傾けてください。あなたにとって、大切なものがきつと見つかります。

● 幸せになるためのハ〇編のヒントから一つずつ実践してみてください。日に日に「心の安らぎ」と「生きる力」があふれてくるでしょう。

幸せになる生き方

〒101-0041 東京千代田区神田須田町1-20
TEL03-5296-7175/FAX03-5296-7174 税込
発行：アルケミックス TEL03-5296-8228

翻訳作業の効率化

翻訳の作業は、大きくふたつに分けることができます。

- 人間よりコンピューターにやらせたほうがいい部分
- 人間がやらなければならない部分

ここを上手に切り分け、適切なツールを使うと、手間を省いて効率を高めることができます。

人間よりもコンピューターにやらせたほうがいいのは「頭よりも手が意味を持つ部分」です。具体的には入力や検索作業、訳語の機械的な統一などが挙げられます。この部分をパソコンに処理させると、スピードアップとミス低減が両立できますし、キーボードをたたく回数も減ってけんしょう炎の予防にもなります。

一方、人間がやらなければならないのは「手よりも頭が意味を持つ部分」です。訳語の適否を判断する、訳語を統一すべきかどうかを判断する、訳文を案出するなどがこちらに属します。ツールややり方によってはこの部分に悪影響が出るので注意が必要です。作業効率が高くなっても、アウトプットの品質が落ちたのでは何をしているのかわからなくなります。

以下、人間よりコンピューターにやらせたほうがいい部分をコンピューターに任せるための工夫やツールなど、私が実践している効率化のアイデアをご紹介します。

■フォント設定

まずは作業画面のフォント設定です。ポイントはふたつ。

フォントは等幅とし、プロポーショナルフォントは避けたほうがいいでしょう。フォント設定で「MS P 明朝」のように「P」と付いているものがプロポーショナルフォントです。プロポーショナルフォントは見た目が美しいのですが、全角・半角の区別がつきにくく、全半角の入力ミスに気づかないおそれがあります。

もうひとつはフォントの大きさです。濁点と半濁点が瞬時に判断できる大きさにします。きちんと入力しても日本語入力ソフトの入力支援機能で濁点と半濁点が入れかわることさえあるので、目で見てさっと判定できるようにしておくべきです。

余談ですが、フォントを大きめにするなどを考えれば、モニターサイズも大きめにしたほうがいいことになります。ノートパソコンでも、外部モニタ

ーとして大きなモニターを接続すれば大画面で快適に作業が進められます。

■入力の工夫

日本語入力の IME もカスタマイズで使い勝手が大きく変化します。

日本語 IME は Windows などの OS に付属するものを使っている人が多いと思いますが、日本語の入力については ATOK が優れているようです。後述する『共同通信社 記者ハンドブック 辞書』が使えるのも ATOK の利点です。

日本語 IME カスタマイズの第一歩は、よく使う単語の登録です。

たとえば、私が使っている ATOK には、「懸濁」という単語が「けんだく」という完全な読みで登録してあります。私が訳す技術論文でよく出てくる単語なのですが、「けん」という漢字は 50 字もあるのでこの登録がなかったら大変なことになります。「この漢字、前にも出すのに苦労したな」と思ったら、どんどん登録することをお勧めします。

とてもよく使う単語は、短縮読みで登録すると便利です。私は、「地球温暖化」という単語を「きて」という読みで登録しています。「きて」とは、「Global Warming」の頭文字「GW」の位置にある日本語キーです。私は日本語をカナキーで入力するのですが、このように「英単語の略になるキーを短縮読みとして使う」ということをよくします。頭の中で「Global Warming は……」と考えながら「きては」とタイプして漢字変換すると、「地球温暖化は」となるわけです。

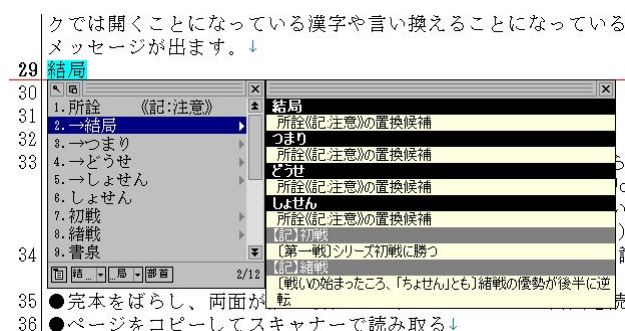
当然ながら、ローマ字入力でもこの方法が使えます。「Global Warming」なら「gw」という読みで登録すればいいし、「Active Carbon」なら「あc」という読みで「活性炭」を登録するという具合です。

「きて」や「gw」なら 2 ストロークですが、「ちきゅうおんだんか」では 11 ストローク（シフトキーや濁点にも 1 ストロークずつ必要）、ローマ字入力で「chikyuonndannka」と入れるなら 16 ストロークも必要になります。それが 2 ストロークと入力の手間が大きく減るわけですが、この方法のメリットはそれだけではありません。入力ミスが減るのです。正直な話、私には、「ちきゅうおんだんか」や「chikyuonndannka」を、毎回、正確にたたける自信がありません。そんな私でも、「きて」や「gw」を打ち間違えることはまずありません。

打ち間違いといえ、自分がよく打ち間違えるパターンも登録してしまうと便利です。私は、「まする」→「ます。」「あるる」→「ある。」などを登録しています。「。」を入力するときに左手小指のシフトキーが遅れることが多いからです。「すまる」→「ます。」などという変わった登録もあります。なぜか、「ま」の前に「す」をたたいてしまうことがけっこうあるからです。ほかに、「ぎじゅつ」→「技術」（「ゆ」のシフトキーが間に合わない）、「けんきゅう」→「研究」（シフトキーをはなす前に「う」をたたいてしまう）なども登録してあります。

よく使う記号も登録しましょう。「から」→「～」などのほか、「どそ」→「℃」なども便利です（読みは「どC」の意味）。

ここまではMS IMEでも使えるテクニックですが、ATOKなら、別売の『共同通信社 記者ハンドブック辞書』が使えます。この辞書を登録しておくと、共同通信社の記者ハンドブックでは開くことになっている漢字や言い換えることになっている漢字には注意をうながすメッセージが出ます。下図は、「所詮」と入力・変換したときのものです。



■原稿の下準備

手の代わりにパソコンにさせて効率を高めようとする場合、原稿が電子ファイルになっていないと不便です。産業系の翻訳では原稿が Word などの電子ファイルで届くのが一般的になっていますが、出版系では紙の完本しかないことがよくあります（PDF ファイルがもらえることも増えていますが）。

紙しかない場合は、スキャナーで読み込み、OCR（光学式文字認識）でテキストファイルにします。やり方は、大きく2種類にわかれます。

- 完本をばらし、両面が読み取れるスキャナーでページ両面を読み取る
- ページをコピーしてスキャナーで読み取る

私は後者の方法を使っています。具体的には、書籍の1ページがA4にぎりぎり収まるくらいまで

拡大コピーしてからスキャンしています。拡大コピーしたものは、翻訳作業中、モニター横に置いて参照します。拡大コピーで字が大きくなっているので読みやすくて便利です。

スキャナーは片面にせよ両面にせよ、ADF（自動給紙）付きのものを使います。ADFがあれば、100枚ほどを自動でスキャンしてくれるからです。

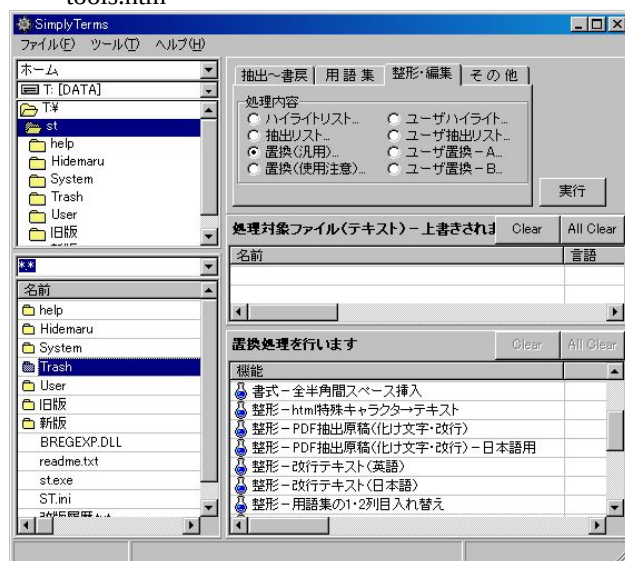
PDF ファイルがもらえれば、そこからテキストを書き出せばいいので、スキャン～OCR という処理は不要になります。

OCR したファイルあるいは PDF から書き出したファイルは、不要な改行がたくさん入っていることがあります。この改行は、置換機能で削除してゆきます。正規表現による置換が使えるエディターなら「¥n」（正規表現で改行を意味する）を半角スペースへと置換します。Word なら「^p」（特殊文字→段落記号）を半角スペースへと置換します。

ただ、確認しつつ延々と置換してゆくのは大変です。そのため私は SimplyTerms という自作ツールで処理しています（SimplyTerms はウェブに公開しています）。

SimplyTermsの公開場所

<http://homepage2.nifty.com/buckeye/software/trans tools.htm>



SimplyTerms の「整形・編集」タブにある機能を使って処理すると、段落の可能性のある部分以外は改行がなくなります。残った不要な改行は、上述の方法で削除してゆきます。

■辞書引き

辞書は、パソコンにインストールするタイプのもを使い、Logophile（旧 Jamming）などの辞書ブラウザで複数辞書の一気に引きをしてしまいます。

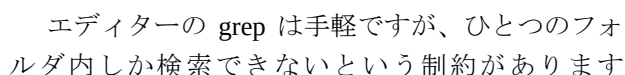
原文の当該部分を選択してマクロを起動すると

辞書引き用のマクロは、ウェブ上に各種、公開されています。秀丸エディター用なら、私の **SimplyTerms** にも同梱してあります。

人名・製品名など、一定の訳語をくり返すものはまとめて置換してしまい、それをコピーペーストすると、手間も省けるし入力ミスも防げます。用語リストに従ってまとめて置換するプログラムがいくつか、ウェブ上に公開されているので、探してみてください。私の **SimplyTerms** でも行えます。

私はさらに一歩進め、範囲選択をしてマクロを起動すると訳文の末尾へ自動的にコピーされるようにしてあります。この機能も、秀丸用のマクロは **SimplyTerms** に同梱してあります。

秀丸で `grep` を起動すると、次のダイアログが出ます。

[illegible]

私としては、いずれも、「手よりも頭が意味を持つ部分」を浸食するツールであり、短期的・長期的に品質の低下をまねくおそれがあると考えています。使わなければならない立場でないかぎり、使わないほうがいいでしょう。

なお、今回ご紹介した工夫やツールは、ほとんどが独立に使うことができます。一度に全部を導入する必要はありません。ひとつでもふたつでも、やりやすいところからトライしてみてくださいねと思います。

日経BP社の新刊ビジネス・経営書

有名書評プロガーも相次ぎ絶賛!

スティーブ・ジョブズ 驚異のプレゼン

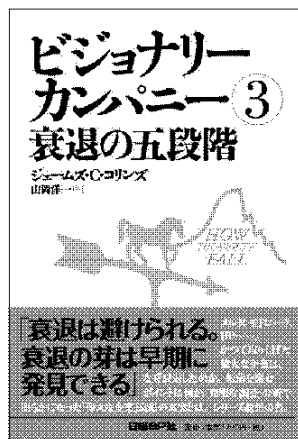
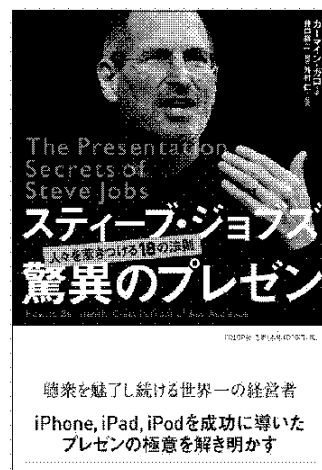
人々を惹きつける18の法則

iPad、iPhoneを生み出した世界一の経営者は
最高のプレゼンターだった!
観衆を魅了し、製品を輝かせる
究極のプレゼンの秘訣を解き明かす!

Amazon.co.jpで**1位!**
「書籍 ビジネス・経済」カテゴリ部門
[書籍 ビジネス・経済] (7月14日現在)
たちまち大増刷!

カーマイン・ガロ 著 井口耕二 訳 外村 仁 解説
四六判 408ページ ●定価**1890円**(税込) ISBN978-4-8222-4916-1
特設サイト <http://ec.nikkeibp.co.jp/nsp/stevejobs/>

※1 Amazon.co.jpは、Amazon.com, Inc.またはその関連会社の商標です。



ドラッカーを受け継ぐ経営学者の話題作!

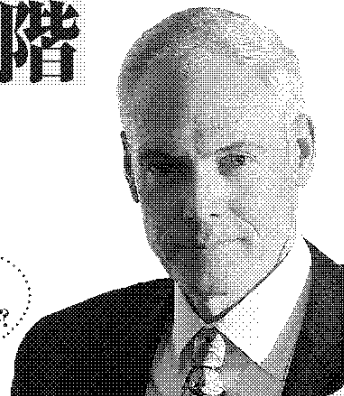
ビジョナリー カンパニー ③ 衰退の五段階

世界的ベストセラー「ビジョナリー・カンパニー」

「ビジョナリー・カンパニー② 飛躍の法則」のジェームズ・C・コリンズが、
メルク、モトローラ、HPなどかつて偉大だった企業がなぜ衰退したのかを
膨大なデータから分析した。すべての経営者必読の書!

ジェームズ・C・コリンズ 著 山岡洋一 訳
四六判 316ページ ●定価**2310円**(税込) ISBN978-4-8222-4817-8
特設サイト <http://ec.nikkeibp.co.jp/nsp/collins/>

偉大な企業は
なぜ衰退し、
なぜ復活できたのか?



発行: 日経BP社 発売: 日経BPマーケティング

お求めは全国書店・ネット書店で!

一翻訳者の仕事場・2010 年

「翻訳通信」100 号刊行、感慨もひとしおである。「翻訳通信」がネット上で配布されるようになってから約 8 年になるが、その前に何年か、こぢんまりと情報や意見を交換し合っていた時期がある。その当時、翻訳の道具やインフラの話を中心に何度か投稿させていただいたが、今回ふたたび筆を執るにあたり、当時の自分の投稿をパラパラと眺めてちょっとした衝撃を受けた。

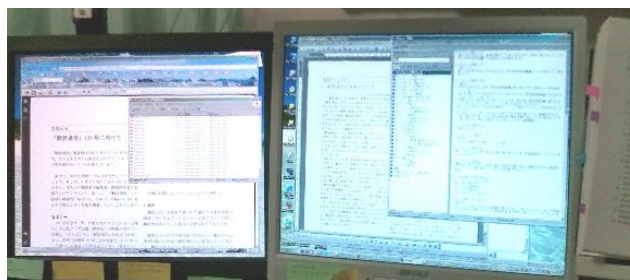
翻訳者はワープロ専用機を買うべきか、パソコンを買うべきか。研究者やマニアが騒ぐインターネットとは何か。16MB のメモリーを積んでハードディスクまで付いた最新 PC の話。翻訳に便利なソフトを使いこなすための MS-DOS コマンド。そんな内容だったからだ。

あれから 15~6 年、私自身も仕事の内容も変化してきたが、翻訳という仕事をとりまく環境も、使われる道具も変わった（誤解しないでいただきたいが、ワープロ専用機を捨てて久しい今日でも、専用機が PC に劣るとは思っていない。今の時代の PC で、なぜあの操作性が再現できないのかと思う）。

現在は翻訳の技術的インフラも多様化し、ジャンルによっては専用ツールも普及している。一概に何がいいとは言えない状況になったし、自分自身も今は最新ツールとは無縁の仕事の主になっている。とはいえ、自分なりに工夫して使っている道具もいくつかある。ネットによる情報交換が盛んになったとはいえ、お互いの仕事場まで覗く機会はなかなかないのが翻訳者の現実である。15 年後にあらためて振り返るためにも、現在重宝している道具の話などいくつか書いてみようと思う。

デュアル・ディスプレイ

1 台の PC でディスプレイを 2 台使用する方法は、すでに実践している人も多いと思うが、資料検索にネットが欠かせなくなった現在、低コストで手軽に作業環境を快適にする手段である。少し前までは、



PC のケースを開けてカードを追加したり、相性問題に悩まされたりと、ややハードルが高かったが、最近はハード、ソフトとも手軽に設定できるようになった。

普通はデュアル・ディスプレイというと、2 台のディスプレイを横に並べて使うことが多い。それを横長のワイド・ディスプレイに見立てて画面を広く使うのだ。私も 17 インチ・モニターを正面に 1 台、左にもう 1 台並べて、正面のメイン・モニターには翻訳の入力画面や電子辞書を、左のモニターにはブラウザやファイラーを表示している。2 つの文書を見比べるときなどは、右と左に 1 つずつ開く。ウィンドウは右画面から左画面へ、左画面から右画面へとマウスで簡単に動かせる。

最初からワイド・ディスプレイを買う手もあるが、2 台使った方が画面も広いし、既存の資源を生かして低予算で構築できる。

デュアル・ディスプレイに必要な物は、デュアル対応のビデオアダプターと OS、それに 2 台目のモニターだけである。既存の環境によっては、モニターを 1 台買い足すだけで足りる。2 台のサイズが違って大丈夫だが、翻訳作業には同じサイズが使いやすいと思う。17 インチ TFT なら 1 万円台で買える。

ビデオアダプターだが、最近の PC は最初からビデオ出力端子が 2 個あるものも多く、その場合はそのまま使える。端子の種類がディスプレイ側のケーブルと合わない場合もあるが、変換アダプターを使えば大丈夫だ。変換アダプターは数百円で買えるが、ディスプレイに付属していることも多い。

PC にビデオ出力端子が 1 個しかない場合、ビデオアダプターを追加することになる。従来はインターフェイスの種類を調べて PC のケースを開けて…という面倒な作業だったが、最近は便利な外付けのビデオアダプターがある。USB に差し込み、ディスプレイ・ケーブルをつなぐだけというものだ。私も以前はビデオアダプターを 2 枚使っていたが、現在はアイ・オー・データ社の USB-RGB という外付け製品を 6000 円程で買って使っている。内蔵アダプターに比べパフォーマンスにやや難があるという話だが、仕事では動画を見るわけではないので、特に困ったことはない。どうしても負担のかかる処理をする必要があるときは、メインのディスプレイの方に表示させれば問題ない。

無事に 2 台のディスプレイを接続したら、あとは

ソフトの設定だが、Windows XP 以降ならこれも簡単だ。方法は簡単に検索できるので詳しくは書かないが、「画面のプロパティ」を開いて、「設定」タブでモニターの配置を決める。これで2枚の画面を広々と使えるようになる。

DDwin と EPWING 辞書

PC 用の電子辞書検索ツールは PDIC などがメジャーだが、私は普段の仕事には DDwin が手放せない。もう5年もアップデートされていない古いフリーウェアで、辞書によっては文字化けしたり、ほかにもこまかい不具合はいろいろとあるのだが、代わるものがない。ただ、便利に使うには最初の設定に一手間かけた方がいい。

DDwin は、EPWING 形式の辞書を検索するソフトである。長年アップデートされていないが、今でも無料でダウンロードは可能である。DDwin の魅力は、なんといっても複数の辞書を串刺し検索できること、そしてマウスを使わずキーボードだけでいろいろな連続操作ができることだ。

EPWING 形式の辞書は、CD-ROM などの媒体で販売されている。どんな種類の辞書があるかは、Amazon で EPWING をキーワードに検索してみるとだいたいわかると思う（EPWING コンソーシアムのサイトにもリストがあるが、情報が古い）。

CD-ROM は、ハードディスクにコピーして使う。CDROM などのフォルダを作っておいて、その下に辞書ごとにフォルダを分けてデータをコピーしておくくと便利だ。

DDwin をインストールしたら、まず「ファイル」→「辞書をサーチする」を選び、辞書データの入ったドライブとフォルダ階層の深さを指定する。これで見つかった辞書名がメニューの下に並び、辞書を選んで検索できるようになる。Ctrl キーを押しながら複数の辞書を選んで串刺し検索もできるが、辞書グループを設定しておくとし使い勝手が良い。

辞書グループは「グループ」メニューから設定できるが、私はここにいくつかのグループを作り、「英和」には英和辞典3つ（新英和大辞典、リーダーズプラス、英辞郎。英辞郎はフリーソフトで EPWING 形式に変換できる）、「国語」には広辞苑、その他のグループに類義語辞典などを入れている。こうしておく、グループごとに串刺し検索ができる。さらに、検索結果がどの辞書でヒットしたものか簡単に区別できるように、辞書ごとにカラーラベルを設定している。

使う前に、「ツール」→「オプション」画面で設定を調整する。フォントなどこまかいところは個人

の好みだが、ぜひ変更した方がよいと思う点がある。

まず、「検索」タブの「検索ボタンで串刺し検索を行う」。これをチェックしないと、複数辞書の一括検索ができない。次に、「該当項目リストの並べ替え」は「項目名順」に設定し、「全項目を自動表示する」をチェックする。さらに、オプション画面ではなく DDwin のウィンドウの左下にある「連続表示」を押して「項目表示」に変えておく必要がある。この設定をしないと、紙の辞書と同じように関係ない続きの項目までだらだらと表示されて検索結果が見にくい。

「辞書バー」タブでは、「辞書ボタンを表示する」をチェックし、次の辞書名の長さを「0」文字に設定している。こうすると、画面左の見出し語リストのところにカラーラベルだけが表示され、どれがどの辞書でヒットしたものかわかりやすい。辞書によって信頼性や特徴が異なるので、どの辞書でヒットした結果かを確認することは必須である。



「その他」タブでは、「検索語入力ボックスにフォーカスがあっても方向キーで項目内容をスクロールする」をチェックする。こうしておく、検索した後、マウスを使わなくても↓キーを押すだけで検索結果を閲覧できる。また、検索直後に Ctrl+F キーを押すと、検索結果内を検索できる。たとえば、face を検索してから結果内で down を検索するなど、長い検索結果のなかから熟語や用例を探すときに重宝する。

検索するときは、グループを切り替えながら串刺し検索をするが、これも Alt+G キーを押して数字を選べば、マウスを使わずに切り替えられる。

最後に、前方一致・後方一致検索について。DDwin は、デフォルトの設定だと自動的に前方一致検索を行うようになっている。これは好みでそのままでもよいと思うが、私はオプションで前方一致検索を無効にして、検索語を入力するときに自分で指定している。たとえば、「about」と入力すれば完全一致検索、「about*」と*を後ろにつけて入力すれば前方一致検索、「*about」と入力すれば後方一致検索ができる。ただし、辞書によっては後方一致検索には対応していない。

ほかにもいろいろな使い方ができるが、興味をもった方はご自分で試してみてくださいと思う。最新バージョンは DDwin32 2.66、Vector などのダウンロードサイトで入手できる。

一つ希望をいうと、翻訳中の自分のメモや訳例をなんらかの方法で取り込み、DDwin で一緒に検索できればありがたいと思っている。それになるべく余分な手間をかけず、リアルタイムに手軽に追加していければ言うことはない。PDIC には自分の辞書を追加する手段があるので、応用できないかと考えている。すでに実践している方、アイデアのある方がいらっしゃれば教えていただければ幸いです。

テキストエディタの色分け機能

これは 15 年前と変わっていない点だが、訳文の入力には可能なかぎりテキストエディタを使っている。マシンの性能が向上し、重さの点では Word でもあまりストレスは感じなくなったが、不要な設定を切ってもなお余計な挙動をするのが気になるのと、テキストに比べるとなにかと融通がきかない。

ちょっとしたテキスト編集には秀丸も使うが、メインに使っているのは WZ Editor である。WZ もバージョンアップのたびに使い勝手が変わり、機能ばかり膨らんで設定しづらくなり、シンプルなエディタの良さを失ってしまった。とはいえ、いくつか使い慣れた便利な機能があって手放せない。その一つが色分け機能である。ほかのテキストエディタやワープロにも似たような機能があるかもしれないので、参考までに。

WZ Editor は書式情報のないテキストを編集するツールなので、基本的に文字を単色でベタ表示するだけである。しかし、「色分けスタイル」を設定しておく、条件に合った文字列に表示の上でだけ色をつけることができる。

たとえば、「で始まり」で終わる範囲を紫色で表示する、という設定ができる。こうしておく、かきかっこで囲まれた範囲が紫で表示されるため、かっこの閉じ忘れを防ぐことができる。これは表示

上だけのことで、印刷したときにはテキスト情報だけなので色分けはされない。

また、文のなかで保留した箇所、あとで直そうと思う箇所などには、★★とマークしておく。そして、★★という文字列があると、太字の赤で表示されるようにしている。こうしておく、と目立つため、あとで探しやすいし、チェック漏れやマークの消し忘れを防ぐことができる。

ほかにも、客先へのコメントやレイアウト指示は橙色、章題などの見出しは青の太字で表示されるよう、マークと色分け設定を組み合わせている。

ちょっとしたコツにすぎないが、書籍などの長いものを訳すときには、こうして表示に変化をつけておくだけでもかなり見やすくなる。

Forvo

ここで一つ便利なウェブサイトの紹介を。

翻訳中は固有名詞の表記に悩むことがある。固有名詞発音辞典などもあるが、十分に網羅していないし、同じ綴りでも国や地域によって発音が異なる。

最近、Forvo (<http://ja.forvo.com>) というサイトを見つけて利用している。固有名詞に限らないが、世界各国のさまざまな単語を、その土地の人が発音して音声ファイルで提供するというユーザー参加型コミュニティである。

たとえば、Michael という単語を検索すると、アメリカ、オーストラリア、香港、フランス、ドイツ、スウェーデンなど、各地のユーザーが録音した発音を聞くことができる。ユーザーが録音したもののなので、訛りや癖、録音環境の影響もあり鵜呑みにはできないが、数人分のサンプルがあれば十分参考になる。

語数はまだ十分とはいえず、サイトが重いという難もあるが、今後利用価値がありそうである。

Google ツールバーのボタン

調べ物が多い翻訳作業には、ウェブブラウザの検索ツールバーが欠かせない。Google ツールバーはたいていの人がインストールしていると思うので特に説明はしないが、カスタマイズまではしていない人もいると思うので、オプションボタンについて少し紹介したい。

なお、私はウェブブラウザとして Firefox を使っている、Firefox 用の Google ツールバーについて書くが、IE 用でもほぼ同じはずである。

Google ツールバーは、オプションの「ボタン」タブで、表示するボタンを選択できる。また、この画面で「追加」を選択し、アドオンのボタンを組み込むことができる。



英和辞典の問題点と理想の辞書

山岡さんからいただいた「お題」は表題の通りです。この話題でしたら、言いたいことは山ほどあります。その中から、わたしが将来へ向けて、今関心を持っている範囲に限って、書いてみます。

わたしは 1993 年に『どうして英語が使えない？ 学校英語につける薬』（ちくま学芸文庫）という本を書き、英和辞典と学校英語を批判しました。その後 2002 年に『快読 100 万語！ ペーパーバックへの道』（同）という本を出版して「多読」を広めようとしてきました。言ってみれば、英和辞典と学校英語の批判から、その両方をなしで済ませる方法の提案へと発展したわけです。

幸い『快読 100 万語！』で提案した多読という方法は、（いわゆる自社比で）たくさんの人に支持されたようです。辞書も文法も（多読前に知っている以上には）利用しない多読でペーパーバックを読めるようになった人はこれまでに数千人に上ると思われます。その結果数多くの報告がわたしの元に寄せられ、次第に（山岡さんのお嫌いな）「ダイレクト・メソッド」による外国語獲得が明らかになってきました。

日本にいてダイレクト・メソッド風というのもおかしいことに聞こえるでしょうが、それは不可能ではないようです。不可能などころか、従来の英語学習とは 180 度異なる方向に歩き出すことでとんでもない世界が見えてくるらしいのです。そこで、どんな世界が見えてくるかについて、一点だけお話しします。そこから理想の辞書も垣間見えてくるし、その先に翻訳の未来も描けるように思うのです。

その一点とは「ことばの最小単位は語ではない。文である」ということです。そこから理想的な辞書のあり方も見えてくるはずですが、理想的な辞書についてはあとで書くことにして、まずはどうしてそんな結論に達したか、を先に書きしょう。

わたしは「どうして？」で英和辞典の問題点をいろいろ書きましたが、それを一言でまとめるなら、「英和辞典は辞典にあらず、単語帳なり」になると思われます。そう断ずる理由は、英和辞典には定義がなく、見出し語の訳語を羅列しているに過ぎないからでした。「どうして？」に書いたことですが、「head＝頭」ではないし、「lip＝くちびる」ではないし、「a few＝二、三の」ではなく、要するに英和辞典の見出し語すべてについて、訳語と元の英単語の間にはずれがあるわけです。（したがって、ま

そして 翻訳を志すみなさんへ

だ英語獲得途中の人（学習者とも言います）には、ただ混乱させられるだけなので、決して英和辞典は薦められないことになります。）

このずれについては『どうして？』に書いたのですがここでは繰り返しません。英和辞典はそれ故単語帳に過ぎないという指摘は今でも変更する必要はないと考えています。ところが、英和辞典のいちばん大きな問題をわたしはわかっていなかったことを、多読が普及するにつれて思い知らされました。それが先ほど予告した「ことばの最小単位は語ではない」ということだったのです。

多読を試みる社会人が少しずつ増えていくと、奇妙な例がわたしの眼を引くようになりました。典型的には中学入学直後に大病をして長い期間学校に通えなかったおとなが数人いて、ほとんどゼロから多読をはじめて見事にペーパーバックを読むようになったのです。そしてこの人たちはおとなでありながら（？）今でも前置詞とか関係代名詞とか主語動詞といったことばさえわかっていないのです。

わたしは辞書を引かずに英語がわかるようになる人たちには、一体何が起きているのかを考えざるをえませんでした。そして実に単純な類似に思い当たったのですが、そんなことにすぐ気がつかないとはなんという鈍い人だと言われるかもしれません。You guessed it. おとなが多読で外国語を獲得する様子は、こどもが母語を獲得するときと同じなのです。

こどもは母語でも知らないことばを親にたずねるではないか、という反論をよく聞きます。けれどもそれはほとんどの場合「内容語」についてでしょうね。しかも「意味」を聞く語の数は最終的にこどもが獲得する語彙のごくごくわずかな一部でしょう。

途中を省いて話を進めると、こどもはおそらく語という単位を知らないでしょう。親が話しかけて耳に入ってくることばはすべて語ではなくて文であって、何か状況を認識するため、あるいは動かすためのメッセージを伝えていると考えられます。そうした文を日常の状況の中でいくつもいくつも聞くうちに、いくつかの文の共通部分として「語」が析出されてくるのではないのでしょうか？

さてまた少し飛びますが、英和辞典に限らず、あらゆる辞書・辞典は共通の土台がありました。You guessed it again! 「見出し語」順に並べられていることです。それは 2 言語辞書である英和辞典でも、英英辞典でも、類義語辞典でも同じです。「言葉の最小単位」を語であると考えからこそ、そうした

基本構成が成り立つのは当然のことです。

ところが言語学的興味から（あるいはあとで書く「翻訳的興味」から）「語」を基本単位と考えることはあり得るとして、言葉の獲得はまちががなく文からだと思われず。

したがって、学習用の辞書は文を単位にしな
ければいけない・・・

これがわたしの理想の辞書です。これまでのようにいわゆる単語から引く辞書は今の時代にはすでに時代遅れです。コンピュータとインターネットを利用して、「文で引く辞書」がこれからの辞書となるはず。それこそことばの本旨に沿った辞書なのです。

一体そんな辞書は作れるのだろうか？ 作れます。作れるはず。作れてほしい・・・そして、その原理はかつて山岡さんが語っていた機械翻訳についての意見と同じです。つまり「文構造を分析するより、似た英文を探してその和訳を提示するがよいのではないか」という意見だったと覚えています。それはわたしの考えていたこととまったく同じでした。これからの辞書は、コンピュータの速度とインターネットの広がりを利用して、分析ではなく、類似をこととします。

具体的には一語を打ち込んで訳語や定義や例文を眺め回すのではなく、文全体を打ち込むと、それと似た語や文構造の文とその日本語訳がどっと出てきて、そこから翻訳にうまく当てはまる日本語を探すのです。具体的にどうやってソフトウェアを設計するかは、山岡さんと相談しながら IT 関係の人にやってもらいましょう。

ではそうした「文の辞書」と翻訳の関係はどういうことになるのでしょうか。管見ながら私見を一応お話ししておきます。これもまた多読を通じて得たことですが、ごく簡単です。やさしいことばをたっぷり吸収することです。

若い人、そして young-at-translation の人たちは、翻訳と辞書の関係をどう考えたらいいいのか？ わたしは多読普及以前にはこんな風に言ってきました。（自分で言うのも何ですが）いわく

1 ページに 3 つも辞書を引かなきゃいけない語があるようなら、その翻訳は辞めた方がいい。内容について知識が足りなさすぎるか、英語について知らなさすぎるのだから。

これを聞いたある教え子は「それは厳しすぎます。せめて 1 ページに 10 語と言ってください！」と訴えました。しかし多読普及後の今は、1 ページに 1 語辞書を引くのも少々危なっかしい気がします。

そこで若い人たちへの具体的な提案ですが、

- * 内容については日本語の本をたっぷり読むこと、
- * 英語についてはやさしい素材をたっぷり聞き、読み、観ること

を勧めます。（その際、多読三原則を使い、辞書は引かないこと！そして、日本語に訳さずにダイレクトに楽しむこと！！）

「内容について」の部分はほとんど自明でしょう。翻訳する分野のことを自家薬籠中の物にしておかなければ、英語で書かれたものを読んで内容を理解することなどありえません。まして文芸翻訳で微妙な陰翳までくみ取することはむずかしいでしょう。

「英語について」の部分には、少し説得が必要だと思われる。わたしは翻訳を志すある人に

プロになるならやさしい本をたくさん読むと
いいですよ

と助言したことがあります。以下はその一つの例証です。（なお、以下は tadoku.org というわたしのウェブサイトの「町の名前をひとつ」というブログにすでに書いた記事から大部分引用しています。）

まずは、次の英文を読んでください。この文はわずか 13 語ですが、「やさしい」語の大事さをこんなに見事に物語る文章はないのではないかとわたしは考えます。

Catherine walked into Wim's office. "Wim, do you dance?"

He stared at her.

これはあるよく知られた作家のおとな向けの小説の一節ですが、ここにはいわゆる「精読」で話題になりそうな要素はまったくありません。一文が長いわけでもなく、むずかしいことばが使われているわけでもありません。こんな簡単なことばだけでできた短い文を「精読」だなんて、いったいどういうこと？と思われるかもしれませんね。

けれども、この文で描かれている瞬間がこの二人

にとって大きな意味を持つ劇的な瞬間なのだと
ことがわかること、それが「多読的精読」だろうと
思います。

どういう風に劇的なのか？

ここでわたしの「ことばの最小単位は語ではなく、
文である」という仮説を使って説明します。そう考
える理由は

**「語から物語は再生できないが、文からは物語
を再生することができる」**

と思われるからです。

しかもこの 13 語は 3 文ですから、十分に物語を
再生することが可能です。

わたしが再生した物語はこういうものです・・・

Katherine と Wim は互いに惹かれ合っている。
けれども二人はこれまでなかなか接近できな
かった。

ひとつの原因は Wim は自分が Katherine に惹
かれていることを認められなかったからだ。

それでじりじりしていた Katherine はあるパ
ーティーがあることを聞いて、この時とばかり
に Wim を誘うことにした。

Wim は突然の、しかも不躰な誘い方にびっ
くりするが、渋々 OK して、ふたりの仲は急速
に進む・・・

本当にそういう展開かどうかは知りません。細部
が当たっているかどうかはたいした問題ではありま
せん。問題はこの場面がそういった「劇的な転換
点」だということが「さらっとわかるかどうか」だ
と言えます。

わたしは「多読的精読とはさらっと読んで深くわ
かること」だと言って来ました。もしさらっとわか
らなかつたら、従来の「精読」をどんなに詳しく適
用してもわからないでしょう。上の文はそもそも
「精読」すべき文章とは見えないでしょうし。

では、この 13 語のどこにそんな劇的な内容が潜
んでいるのか？

この 13 語の表現している場面が劇的であること
を読み取るには、いわゆる「語彙力」や「文法」で
はわからないことがいくつもあります。

* walk into

* office

* Do you dance?

* stared at

こうしたことについて、明確なイメージを持って
いないと劇的であることはわかりにくいと思われま
す。どれもこれまでの「精読」では問題にならない
箇所ばかりです。

一つ一つ説明しましょう。

* walk into

他人の部屋に walk into するということは普通は
やりません。たくさん本を読み、聞き、映画を見
ていると、部屋に入るときはかならず（たとえドア
が開いていても）ノックをします。

walked into Wim's office ということは、Katherine
がノックもせずに Wim の部屋に入ってきたという
ことです。「ある人」はこの文を読んで、「乗り込
んだ」ということばを使いましたが、その通りだと
思います。

* office

もともと、英和辞典にあるように、office を「事
務所」とイメージしたら、乗り込む感じは出てきま
せん。「office＝事務所」という一対一対応がいち
ばん悪さをしているとも言えます。

（調べた英和辞典はどれも「事務所」を最初に
挙げています。

「語彙力増強」を唱える人たちは office を
いったいどう覚えるのしょう？

office など、多読するうちに訳語がわから
なくなる語ですね。

もちろん日本語の訳語ひとつで済ませること
など無茶です。

すると、語彙力増強を考える人は訳語を全部
覚えるのでしょうか？

他方、たっぷり読んだり聞いたり観たりして
いる人の場合は office の訳語は浮かびませんが、
walked into Wim's office の表していることは受
け取れるし、その奥にある物語は再生でき
る・・・ 不思議ですね。）

ついでに言うと、

Katherine walked into Wim's 事務所。

という文は意味をなさないという気がしますね。

乗り込むものにもない、無意味な文とわたしには受け取れます。

「（車で行かずに）歩いて行った」というなら、into ではなくて walked to Wim's office でしょうね、たとえ「事務所」と受け取ったとしても。

＊ Do you dance ?

部屋に入ったら普通なんらかの挨拶をするものですが、Katherine はいきなり「ダンスできる？」と聞いています。

入ってすぐ、しかも I wonder if you dance. でも、I hope you love dancing. でも、You don't look like a dancing person, but... でもない切り出し方はかなり異常です。

この文を読んだ「ある人たち」は口々に「[Katherine は] 酔っぱらってるんじゃないの？」とか「水着着ていたとか？」と言って、この場面の異常さを不思議がっていました。この 13 語を「不思議だ、異常だ」と感じないで読んだとしたら、「やさしい英語」の吸収量が足りないと言えるでしょう。

＊ stared

そんな不躰な Katherine ですから、Wim が stare するのは無理ありませんね。（『どうして英語が使えない？ ペーパーバックへの道』を参照！）

さて、たった 13 語ですが、この場面の異常さはわかってもらえましたか？

ここでもう一度強調したいのは

「やさしい語が使われた短い文がやさしいというわけではない」

ということです。

そして、into や office や Do you dance? や stare

といった、

むずかしいやさしい語の奥行きや色合いや広がりや勢いや味や匂い

を吸収するにはそういう「やさしい文」にたくさん触れなければいけないということ

です。

「精読」などというものは無いのですが（あるとすれば「注意深く読む」くらい？）、日本英語でいう「精読」に使われる「むずかしい文」ではなく、「やさしい」語だけで文になっているような絵本や本や、映画や、毎日の会話にたっぷり触れること、それだけが「やさしくてむずかしい語」を会得する道のように思われます。

なお、そういう多読的精読ができるのは酒井さんだけではないか、という突っ込みがあるやもしれませんが、上に出てきた「ある人」たちは 1000 万語前後多読している人たちです。4 ヶ月ほど前に上の 13 語の文を読んで、鋭い（というか、多読的にはごく当たり前の）感想を述べてくれました。

さて、これからどんな分野の翻訳をめざすにしても、おそらくいちばん大事なのは、英語の「機能語」を何気なく、しっかりとわかることだろうと思います。そのためには絵本や児童書の多読、音声聞きながら本を読む聞き読み（できれば聞き読みしながらシャドーイング）、そして映画や海外ドラマの大量吸収を勧めます。お勉強ではありません。こうした素材を心ゆくまで楽しむことでいちばん大事な目に見えない力を豊かにつけることができるはずです。

Good luck. We all need it.

筑摩書房の多読の本

快読100万語! ペーパーバックへの道

酒井邦秀 ○辞書なし、とばし読み英語講座 すぐ読めるやさしい本をたくさん読めば、ホンモノの英語が身につく。奇跡をよぶ実践講座! 〈ちくま学芸文庫〉 1050円

どうして英語が使えない?

酒井邦秀 ○「学校英語」につける薬 「でる単」と「700選」で大学には合格した。でも英語ができるようにはならなかった「あなた」へ。 〈ちくま学芸文庫〉 1050円

さよなら英文法! 多読が育てる英語力

酒井邦秀 「努力」も「根性」もいらない! 愉しく読んで豊かな実りを。人工的な「日本英語」を棄て、真の英語力を身につけるためのすべて。 〈ちくま学芸文庫〉 998円

英語は多読が一番!

クリストファー・ベルトン 渡辺順子訳 単語の意味を推測する方法からレベル別本の選び方まで。これで「ハリボテ」も英語で読める! 〈ちくまプリマー新書〉 756円

筑摩書房

サービスセンター 〒331-8507 さいたま市北区榑引町2-604 電話048(651)0053
ホームページ <http://www.chikumashobo.co.jp/> *表示は定価(5%税込)

翻訳を考える本

英語の発想——翻訳の現場から

安西徹雄 直訳から意識への変換ポイントは、根本的な発想の転換にこそ求められる。英語と日本語の感じ方、認識パターンの違いを明らかにする翻訳読本。 〈ちくま学芸文庫〉 840円

英文翻訳術

安西徹雄 大学受験生から翻訳家志望まで。達意の訳文で知られる著者が、文法事項を的確に押さえ、短文を読みとくしながら伝授する、英文翻訳のコツ。 〈ちくま学芸文庫〉 924円

さらば学校英語 実践翻訳の技術

別宮貞徳 英文の意味を的確に理解し、センスのいい日本語に翻訳するコツは? 日本人が陥る誤訳の罠は? 達人ベック先生が技の真髄を伝授する実践講座。〈ちくま学芸文庫〉 1050円

達人に挑戦 実況翻訳教室

別宮貞徳 達人ベック先生の翻訳教室を紙上に再現。幅広い分野の課題を出題、生徒の訳例を俎上に、的確な読みと一歩上行く訳を教授する、上達約束26講。〈ちくま学芸文庫〉 1365円

裏返し文章講座——翻訳から考える日本語の品格

別宮貞徳 翻訳批評で名高いベック氏ならではの文章読本。翻訳文を素材に、ヘンな文章、意味不明の言い回しを一刀両断、明晰な文章を書くコツを伝授する。〈ちくま学芸文庫〉 1050円

辞書出版はどこに向かうか

「電子書籍元年」と言われている。従来も電子デバイスにおける書籍ビューワーの開発や、ケータイでの電子コミックなど、漫画を主とした電子書籍の流通は伸張を見せてきていたが、ここにきて直接には iPhone、iPad のヒットと、AppStore でのアプリケーションのダウンロード販売、およびそれを追いかける Android 携帯の動きなど、通信キャリア、電気メーカー、印刷会社、新聞社、そして出版社と、広く業界をあげて乗り遅れまいと名乗りを上げ、合従連衡の動きを見せるのを、連日のニュースや報道で頻繁に目にするようになった。

一昨年からの Google による書籍の電子データ化と著作権を巡る一連の騒動による衝撃とほぼ同時に、iPhone が電子書籍を含むアプリケーションの流通も含めたシステムとして立ち上がり、ある熱狂をもってユーザーに受け入れられたことで、電子書籍ビジネスとその周辺は、その動きを一気に加速させたように見える。これまでも、ケータイ、スマートフォンや PDA、PC へのコンテンツのダウンロード販売がなかったわけではない。しかし、iPhone と AppStore の成功により、これまでの出版メディアの側からは今ひとつ具体的に意識されていなかった、電子コンテンツを求めるマスとしてのユーザーと、それへの供給チャネルとなる新たな流通システムが、明確な輪郭をもった実体としてイメージされはじめたということではないか、と思われる。この事態は、約 10 年前に、爆発的な広がりを見せると言われ、結局それにはいたらずにしぼんでしまった PDA の Palm 用辞書アプリ*1 を制作した者として、実に感慨深く思われところである。しかしながら、やはりこの業界をあげての関心の高まりの背景に、長きにわたる出版業界の低迷と閉塞感が横たわるのを看過することはできない。約 15 年にわたり売上の落ち続ける紙の書籍の先行きの暗さに比して、新たな電子書籍の可能性を希求することは当然のことでもある。辞書とても例外ではない。もっとも早く電子化が進み、成功したと言われる辞書であるが、ヒット商品としての、いわゆる電子辞書の普及という時期を経て、あらゆる書籍が電子化の次のステージに向かうかのように見える現時点にあって、辞書がどういう状況にあり、どういう可能性が考えられるのかについて、出版社の中で、辞書編集に関わる者としての管見を述べてみたい。

辞書の電子化と電子辞書

辞書の電子化は、およそ 20 年前に EPWING など CD-ROM 用の電子出版規格ができた時点にさかのぼる。CD-ROM の部数じたいは大きなものではなかったが、この時期にはメーカー PC へのバンドルが行われ、そのロイヤルティ収入が相当にあった。しかし、CD-ROM による辞書はそれ以上の広がりを見せずに、縮小して行く。原因としては、辞書を切り替える際にいちいち CD-ROM を入れ替えることの不便さがあったかと思われるが、ハードディスクインストールタイプや、仮想 CD-ROM などの手段があってもそれ以上の広がりを見せず、また辞書以外の CD-ROM アプリケーションも消えていったことから、むしろ原因は、同時期普及し始めたインターネットにあるのではないかとも思われる。つまり、CD-ROM ドライブという固定した環境よりは、オンラインで開放された環境のほうに、ユーザーの関心領域がシフトして行った。

ちょうどこの時期から、IC 型電子辞書、いわゆる電機メーカーが開発し、専用筐体で販売する「電子辞書」が家電店や通販を中心にヒットしはじめた。周知のように、その操作の分かりやすさ、軽さ、電子的な検索方法によって、急激に普及しはじめ、辞書の市場に大きな影響を与えることになった。

電子辞書は業界団体の調査（2009 年）では、1996 年には台数で約 1 万台、金額で約 1 億円ていどだったものが、2007 年には約 290 万台、約 480 億円と約 10 年で急激な成長を遂げている（ちなみに、2008 年は、約 250 万台、約 420 億円と落ち込んでいる）。一方、紙の辞書はといえば、1996 年頃の 1200 万冊から 2008 年には 650 万冊ていど、とおおよそ半減しており、販売金額も約 300 億円から約 160 億円と落ち込んでいる。

われわれにとって由々しき紙の辞書の落ち込みには、もちろんいくつかの原因が考えられる。現在のジャンル別販売金額を 10 年前を 100%としたときの比率でみると、以下ようになる。

国語・漢和・古語	約 60%
その他国語	約 40%
実用大型国語	約 15%
学習一般英語	約 40%
実用英語	約 6%
第二外国語	約 36%
中学生用	約 97%
小学生用	約 350%*2
全体	約 55%

この数字をもとに推測してみると、紙の辞書の落ち込みには以下の要因が考えられる。

1. 教育課程の変化
2. インターネットの影響
3. 電子辞書の影響

まず、教育課程の変化であるが、国語のうち、特に漢和・古語の減少については、高等学校および入試における古典の比重が減ってきたことがひとつの理由として考えられる。

次に、実用英語および大型国語辞典も含む一般実用辞典の極端な落ち込みが認められる。これに対して考えられるのはインターネットの普及である。従来は百科的な知識も含めてこれらの辞書が引かれていた一般向けの幅広い知識は、まさにインターネットの中にあふれている情報によって代替されうるものである。

また、インターネットの情報とは直接競合しにくい学習要素の高い辞書、特に学習英和および第二外国語系辞書が減少している点は、やはり電子辞書の影響が考えられる。電子辞書メーカーは、ある時期から高等学校への営業を行っており、学校によっては推薦辞書として電子辞書を推すところもある。実際に見聞きしたことであるが、ある教室の生徒のうち、紙の辞書を使っている生徒は数人にすぎず、あとは全部電子辞書、という状況が珍しくない。高等学校でこの状況であるので、大学生になっても電子辞書を使い続けるわけである。大学課程における第二外国語の比重の低下もそこに加わっている。

私はここで電子辞書を非難するものではない。むしろ、辞書に新しい可能性をきり開いた画期的なツールとして評価しているし、また、それによって、先に見たように、台数・販売金額ともに大幅に増やしてきたこと、すなわち、紙の辞書の落ち込みの一方で、総体としての「辞書」の市場を拡大し、かつその結果、辞書データへのロイヤルティとして、出版社と著者にある利益をもたらしてくれていることも大きい。しかしながら、それを前提に、やはり以下の問題をあえて指摘しておきたい。誤解のないように言うと、メーカーは、あくまでユーザーの利益に立って、ぎりぎりのコスト抑制に努めている結果であり、それを理解した上でである。

まず、辞書の多様性の問題がある。現状はどのジャンルでも、相当数の版元がそれぞれの特長をもった辞書を刊行している。対象別、難易度別に必要な辞書、自分の目的に合った辞書を広く選ぶことができる。たとえば、ある一定の売上部数以上のものにしばっても、学習英和では10の版元から28種類のものが出されているが、電子辞書ではメーカー側が

採用している辞書は1〜3でいどである。

たしかにいかに電機メーカーと言えども、28種類もの辞書を1ジャンルで開発し、そろえることは難しいだろうし、それをすれば開発コストがたいへんにかかり、商品としての競争力を低減させ、ユーザーを困らせることになるだろう。

同様に、ジャンルごとに辞書を選択することが難しい、という問題がある。つまり、電子辞書の場合は、多い場合は150もの辞書およびその他コンテンツが搭載されていて、各ジャンル（たとえば、国語辞典や英和辞典）で複数の辞書が入っている場合もあるが、たいていはひとつしかなく、紙の辞書で、英和はこれ、国語はこれ、というように辞書ごとに組み合わせることができない。ある機種を買えば、その機種での組み合わせしか選択できない。場合によっては、たまたまその辞書が入っていたから使っているということになる。が、カードによる辞書の追加もできるものがあるので、上述のように辞書が増えれば、そういう方向での解決もできるようである。

最後に、ロイヤルティの問題がある。これは電機メーカー側の努力のあらわれでもあると思われるのだが、市場で競争力を保ち、より多機能・多コンテンツにしていくためには、全体的にコストを下げる必要があり、辞書データへのロイヤルティもその対象になりうる。かくて、年々下がって行く傾向が続いている。上述のように、いったん採用されれば、他の辞書はほとんど入らないので、単価は少額であっても、グロスで利益を得ることができる。したがって、出版社側でも採用されるために単価を下げて行くことになる。採用になった場合は、そこで得られる利益で、紙の辞書の落ち幅を補い、改訂用の資金とすることも可能だが、不採用になったり、そもそも電子辞書に向かない辞書の場合は、非常に苦しい状況になる。不採用になった側はダンピングを訴える訳にもいかないが、そもそも公正な値段というものはいくらなのか、はっきりしないこともひとつの問題ではないだろうか。

紙の辞書の場合は、出版社のシステムのなかで、プロダクトとして生み出され、管理されており、編集費、組版費、印税、印刷や製本、資材などの調製費、間接費等々すべてをいれ込んだ原価計算のなかで、計画どおりの部数を売れなかった場合を除いては、利益が出るようになっている。出ない企画は、そもそも成り立ち得ない。

ところが、コンテンツ・データ提供の場合は、たいていの場合、紙の辞書で損益計算が終わっている段階で、そのデータを提供することになるので、損

益分岐点が存在しない。辞書制作にかかる費用の構造は会社が違ってもそれほど変わるはずはない。であれば、業界の問題として、データ提供の値段の下限を、その計算の仕方を検討してもよいのではないかと思う。

媒体転換

このように述べてきたが、とはいえ、紙の辞書の販売部数が減り、より寡占化の激しい（競争の厳しい）電子辞書へのコンテンツ採用とロイヤルティの問題のなかで、再生産ができなくなる辞書が出てくることを、市場の変化に伴う当然の結果だと考えることもできよう。商品にもその時々波があり、たとえば百科事典や文学全集など教養や教育が中心を占めた「エデュケーション」の時代が、やがてマンガや雑誌を中心とする「エンターテインメント」の時代に移ったように、市場の摂理として、辞書の需要が縮減しており、それに合わせて収まりきれないものについての淘汰が起きているのだということかもしれない。

しかし、すでに数字を見たように、紙と電子辞書を合わせた冊数（台数）および金額は、それ以前の紙のみの時代よりもけっしてしぼんでいるとは言えない。電子辞書は単価が高く、さらに1台に複数の辞書が含まれるために、単純に合算で比較はできないし、また複数の辞書が入っていることから、ユーザーが必ずしもそのなかの特定の辞書を目的として購入しているとも言えないが、しかし、新しいツールと使い方、利便性が提供されることで、辞書の新たな需要が掘り起こされた、と言えるのではないか。あるいは、辞書はいつの時代でも一定必要とされており、その需要は極端に縮減はしない、と。

であれば、ここで起きていることは、辞書への需要を基盤として、その乗る媒体が転換している、つまり紙から電子への媒体転換の問題であると言える。

よく「出版社はコンテンツを持っているので強いですよ」と言われるが、先に述べたようにデータもしくはコンテンツと言われる、いかようにでも値段のつくものは、逆に言えばそのものじたいには値段がつけれない、もっと言えばそのものだけでは売ることのできないものではないか。著作権者が印税を得るのはまさにコンテンツに値段を付けているのであるが、出版社が印税をもらってはいけない。出版社は、従来、紙の本に値段を付けて売ってきたのである。当たり前のことだが、要は、紙の束に付加価値を付けて紙を売るビジネスモデルであった、といえるのではないか。紙の束というのがあまりに

乱暴ということであれば、その媒体を作り、売るシステムによって利益を得てきたと言い直せるか。つまり、著作権者からアイデアをもらい、それを整え（編集）、紙の束を仕入れ、墨をつけ、綴じて、配送し、問屋におさめる、印税の計算をして先生にお払いする、などなど、これが辞書だとさらに大掛かりになるので、辞書用のフォントを開発したり、薄紙を開発したり、自社工場を持ったり、ということによって、付加価値を高めてきた。

グーテンベルク以来約550年、紙の印刷術があまりに完成された技術として、ほぼ唯一の情報媒体として当たり前になっていたことから、われわれは紙の本もまた情報媒体の一形態である、という事実をほとんど意識してこなかった。「紙もまた情報媒体のひとつにすぎない」と意識するところから、「もうひとつの」情報媒体である電子媒体への、出版社としての取り組みがはじまるのではないか、と思っている。よりよい「辞書」を考える際に、最初から「紙の辞書」を前提に考えるのではなく、これまでは、「たまたま紙」だったと考えてみる。すると、では「紙の表現」から離れた「辞書」とは何か。そもそも「辞書」とは何か。という命題が立ち上がってくる。もうひとつの媒体での「辞書」を考える際にはそこまで掘り下げて考えないといけないのではないかと考えている。

辞書の電子化対応とは

では、電子化が辞書にもたらすものは何であろうか。まず、電子的な手段との関わりが特長となっている辞書について見てみたい。

『ウィズダム英和辞典第2版』（三省堂 2006）

コーパス言語学の方法を全面的に使って作られた初版（2002）をさらにブラッシュアップした。初版編集時に構築した「三省堂コーパス」を利用。すでに英米の辞書はコーパスを使っているのが当たり前になっており、日本でも、ほかにも『ジーニアス英和辞典第4版』（大修館書店 2006）、『ロングマン英和辞典』（桐原書店 2007）があいついで独自のコーパスをもとに編纂されている。「三省堂コーパス」は日本ではもっとも早く構築された辞書作成のためのコーパスであり、英米のコーパスと異なっていて、日本人英語学習者が必要とする英語を配慮したバランスのとれたコーパスとなっている。『ウィズダム英和辞典第2版』では、これをもとに、主要な語に対して頻度の高い共起語の揭示、詳しい語法解説、訳語の同じ語の類義解説など、大量の解説を付けている。また、辞典中の用例をコーパスとして活

用できる「Dual WISDOM 用例コーパス」がウェブ上で利用できる。

コーパスは大量のテキストデータをコンピュータで解析できるようにしたもので、これによって提示される語の共起情報やそれらの頻度情報などにより、これまで内省で処理していたものが客観的な言語事実として、その法則性も含めて確認できるようになった。イギリスの BNC (British National Corpus) などが知られ、広く活用されている。また、Sketch Engine のように、自分でテキスト収集をしてコーパス構築のできるツールも開発されている。日本でも、日本語コーパスとして、国立国語研究所が中心となって、特定領域研究『代表制を有する大規模日本語書き言葉コーパス』（BCCWJ）が構築中である。

また、『小学館コーパスネットワーク』では、BNC、WordbanksOnline が独自のインターフェースで利用できるほか、世界最大の科学技術英語コーパス『PERC Corpus』、日本の中学・高校生英語学習者による自由英作文コーパス『JEFLI』が利用できるようになっている。

『デジタル大辞泉』（小学館）

国語＋百科語の国語中辞典。約 24 万語。紙（増補新装版 1998 約 22 万語）の改訂は行わずに、データ上での更新作業を行い、年 3 回コンテンツ更新。ネット上での辞書検索サイト JapanKnowledge のほか、iPhone アプリ、yahoo!などのポータルサイトの辞書としても広く使われている。

『大辞林 第三版』（三省堂 2006）

国語＋百科語の国語中辞典。約 25 万語（書籍約 23.8 万語＋ネット上で 2.2 万語）。書籍購入者に対してデータ更新のあるウェブ辞書が使える「Dual 大辞林」のサービスがある。

iPhone 版「大辞林」は iPhone 版辞書アプリのなかで最大のヒット。

『日本国語大辞典 第二版』全 13 巻（小学館 2000）

総項目数 50 万語、用例 100 万の日本最大の国語大辞典。JapanKnowledge でオンラインサービスがあり、書籍で買くと 20 万円超が、月額 1575 円で使える。

電子化が辞書にもたらすものとしては、編集製作手段のデジタル化もあげられよう。タグ付きの電子データとして編集を行うことで、電子的な検索によって用字用語や内容の統一的なチェックが可能であ

るし、またプログラムによる処理も可能である。その一環として、組版したいもプログラムを介して、自動的に組版処理を行う。『大辞林 第三版』はデータ形式として XML を採用し、ウェブの検索システムや外部へのデータ提供も基本的に同一のデータで行った。なによりも、意味と構造を厳密に定義する XML への落とし込み時に、論理的な整合性をもったデータに整備できたことが有用であった。

電子媒体の辞書が、検索仕様において紙の辞書には実現し得ない検索を実行できることはすでに周知のことだが、これまでの電子媒体にあまり見られずに残念に思っていることとして、表示の改善がある。

紙の辞書の紙面は、（きちんと考え抜かれたという前提付きであるが）版面の特性と伝統的な辞書組版の技術を活かして、約物や記号等スペース節約のために省略表現を多用しながらも、意味内容を理解しやすい作りをするように努力がなされている。これは 1200dpi 超の解像度をもつ紙と、3 ポイントのルビでも明瞭に印刷する技術、そしてそれをおさめる版面サイズのバランスによる。ところが、現状ほとんどのデジタル系の辞書では、紙の紙面に似せようとして似せきれずの表示にとどまっているものが大半である。デジタル媒体と紙の媒体とでは、その特性が異なるので、同じことを伝えるにも、おのずから別の表現が必要になる。あるいはデジタルにしかできない技術を使うことによって、紙以上の表現をなし得る可能性もあるだろう。iPad など、従来以上の高解像度をもったデバイスなどもでてきている。今後、辞書の内容の充実とともに、表現のしかたについても追求を重ねて行ければと思う。

現在の辞書を取り巻く状況として、電子媒体にどう取り組んで行くかという課題が、大げさではあるが辞書の存続にも関わる問題であるという問題意識から、今回は電子媒体にずいぶんと偏った話題になってしまったことをお詫び申し上げたい。

翻訳に少しでも資する辞書作りができるように心がけたい。ご要望や注文があればぜひお知らせ願いたい。

--

*1 http://www.sanseido-publ.co.jp/publ/ep/mc_palm.html

*2 小学生辞書の大きな伸びは、小学 1 年生から辞書引きは可能だとする深谷圭助氏の辞書指導の影響が大きい。